明治四十二年七月二十日發行（毎月一回二十日發行）

July 20th 1909.

# Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 208

# 大日本蠶絲會報

## 第貳百八號要目


▲精力主義の成功者 若尾逸平翁▼

●桑の代用植物 理學博士 佐々木忠次郎

●乾繭の要旨は繭層をして常に乾燥の狀態に在らしむるにあり 蠶業講習所技手 服部柳太郎

●蠶の神經分布の研究 受縣農學校教諭 蠶業講習所技手 池田榮太郎

●製絲業經營の方針 蠶業講習所技手 松下憲三朗

●乾燥の方法及其原理 農學博士 小松豐作

●蠶業經營方法 蠶業講習所技手 大森順造

●秋蠶に「あなあき」繭は何故出來るか 蠶業講習所技手 高橋伊勢次郎

●何故に原種用蠶種の奬勵を爲すか 鳥羽久吾

●柞蠶は如何なる習性を有するか 勤業檢査協會技手 長岡哲三

●予の觀たる佛蘭西の蠶業 農學士 廣瀨次郎

●中米及南米視察談 法學士 岡實平

●我組合の事蹟 北越蠶業講習所長 松田彦

●鹿兒島縣の蠶絲業は如何にして發達したるか 鹿兒島製絲同業組合長 上田義高

●風穴蠶種を再入穴したる成蹟如何 千藤一策

●蠶病撲滅策 前川淺吉

▲蠶種改良の先覺者之為頌 故川村永之助翁▼


TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchome, Kanda, Japan.

# 特許中原式

乾燥器佛國第三九貳三三九號
煮繭器伊國出願中

中原式乾燥器は大方諸氏の歓迎なる所以に増進せしむる為なり其實績は既に既設諸氏に於き詳細御調査の上は他器に比し優用者諸氏の此際陸續御注文を願上候

## 賞狀抄載

金水館 明治四十一年九月より同十二年九月迄試驗の結果普通繭に比し輪質少なく繰糸本に於て貳分増 繰糸工程 壹割五分増 繭價に於て 壹割を減じた好結果を来し候間更らに 參臺 増設す

多勢製絲場 前場所と就此評を唱ふる人々の之候由に候得共之等は 實地の經驗を有せざるの人 なるべく将来の考案に付て願はい ざ知らず現今世上に現れ居る器とし て此右に出るもの非るべく 事務汽罐機に於ては他来の煮繭器六七個に優業するも 繭分事業の進捗か来し のにて疑れり 落繭少なく 生絲品位には 論色澤純良に一升壹分五厘の上 増量 使用者は 揚繭少なく 繭一生皮吟 烈も大いに 減少し 来り申候繭の道 り現今に於ける 煮繭器の一位たるは斷言 致され 候下器

久熱式

東京市本所區德右衛門町三四
特許中原式合資會社 電話 浪花二千二百二十六番 振替貯金口座壹六五〇四番


# 弔詞

大日本蠶絲會副會頭從四位勳三等農學博士酒匂常明君卒然トシテ遠逝セラル嗚呼悼シイ哉

君資性淵達ニシテ廉直夙ニ意ヲ農政ニ注キ國富ノ涵養ヲ以テ自ラ任シ殖産興業ニ貢獻セラレタルノ功勞洵ニ著大ナルモノアルハ世人ノ識認仰望スル所ナリ而シテ君ノ我大日本蠶絲會參事ニ擧ケラレタルハ去明治三十五年ニシテ其翌三十六年ニハ副會頭ニ推選セラレ爾來八年常ニ本會ノ爲ニ盡瘁シ本會今日ノ隆運ヲ見ルニ至リタルモノ君カ力與テ大ナリト云フヘシ茲ニ於テカ本會

總裁殿下ハ賜フニ二等有功章ヲ以テセラレタリ而シテ將來本會ノ發展上君カ經營翼賛ニ期待スル所益多キモノアルニ當リ溘焉トシテ逝キ幽明其境ヲ異ニセリ嗚呼君ノ逝去ハ獨リ本會ノ爲ニ惜ムノミナラス實ニ本邦産業界ノ一大不幸ナリト謂フヘシ焉ソ痛歎ニ堪ユヘケンヤ

茲ニ本會ヲ代表シ恭ク弔詞ヲ靈前ニ呈ス庶幾ハ享ケヨ

明治四十二年七月十三日

大日本蠶絲會會頭正三位勳一等男爵　松平正直

# 大日本蠶絲會報　第二百八號

## 目次

口繪

●東京蠶業講習所夏秋蠶部開所式當日の光景
●故大日本蠶絲會副會頭農學博士酒勾常明君

論叢……理學博士　佐々木　忠次郎　一―一四

●桑の代用植物
●乾繭の要旨は繭層をして常に乾燥の狀態に在らしむるに在り

蠶業講習所技手　服部柳太郎
愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
蠶業講習所技手　松下憲三郎
蠶業講習所技手　小松豐作

一四―一八

●蠶の神經分布の研究
●製絲業經營の方針
●乾燥の方法及其原理

演壇……農學博士　大森順造　一八―二七

●蠶業經營方法

芳集……蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎　二七―三八

●秋蠶に「あなあき」論は何故出來るか
●何故に原種用蠶種の奬勵を爲すか
●柞蠶は如何なる習性を有するか
●蠶種界に行はるゝ不正の實例

勤業模範場技手　長岡哲三
在松本市　不正蠶種撲滅期成同盟會

即門……二七―三八

●予の觀たる佛蘭西の蠶業

農學士　廣瀨次郎
法學士　岡實

●中米及南米視察談
●我組合の事蹟

北越蠶業講習所長　松田彥平

●鹿兒島縣の蠶絲業は如何にして發達したるか

鹿兒島縣製絲同業組合長　上田義高

心影……三八―四四

●精力主義の成功者若尾逸平翁

重富三男三

●蠶種直輸販賣者の鼻祖故川村永之助翁

秋田縣農學校教諭　田村兼藏

實務……四四―四五

●桑園年中行事

愛媛縣農學校教諭　池田榮太郎
馬場由

絲況……四五―四九

●横濱市場

●蠶病撲滅策

讀者の預公……四九―五一

●風穴蠶種を再入穴したる成蹟如何

千藤一策
前川淺吉

問答……五一―五三

●蠶卵の耐寒力に就き質問答●乾繭釜用消毒器の件に就き質問答●野鼠の驅除豫防に就き質問答●土質に就き質問答●全年育の生絲に就き質問答●桑樹害蟲に就き質問答●煮繭に就き質問答

會務錄事……五四

●支會職員の囑託＝地方委員嘱託職員の囑託＝通信委員の囑託＝特別會員の推擧

蠶桑雜觀……五四―六四

●韓皇勸業模範場行幸＝東京蠶業講習所卒業式＝東京蠶業講習所夏秋蠶部開所式＝酒勾副會頭の訃＝本年の春蠶＝世界の蠶況
●文藝＝蠶海消滅＝新刊紹介

松市本市に新設せられたる東京蠶業講習所夏秋蠶部開所式當日の光景

Inauguration de la Section des vers d'été et d'automne de la Station sériciole de Tokio, nouvellement établie à la ville de Matsumoto.

冷藏庫の全景　事務所の全景　蠶室の一部

正門より見たる光景

# 八月號の目次

讀者諸君と御約束した原稿は頁に制限せらるゝとか、寄稿者に延引ならぬ支障があるとかいふやうなことで悉く掲載し得られぬ場合の多いのにはイツも乍ら困つて居る併し之亦止むを得ぬことゝして御寛恕を請ひ例に依て次號に掲載すべき目次の重なるものを擧れば左の如くである


●夏季に於ける製絲用水曝露法　農學士　中村雅次郎
●冷藏庫に就て　京都蠶業講習所技手　三田伊三郎
●蛆蠶に寄生する蛆　東京蠶業講習所技手　丹羽四郎
●米國の工女と日本の工女　在紐育　農學博士　福島延惠
●蠶業經營方針　法學士　大森順實
●中米及南米視察談　同　岡實
●甲州水害後の蛇の消滅と蠶業との關係　石田孫太郎
●鹿兒島縣の製絲業は如何にして發達したるか　上田義高
●製絲業經營の方法　東京蠶業講習所技手　松下憲三朗
●乾燥の方法及其原理　東京蠶業講習所技手　小松豐作
●岐阜の生絲　東京蠶業講習所技手　吉池慶正
●屑物整理　學藝士員　吉永信
●精力主義の成功者若尾逸平翁　重富三男三


## 會員諸君に望む

春蠶の狀況に就ては通信委員諸氏を始め其他熱心なる會員諸君中より時々之が報導に接し其都度之を公にして一般當業者の參考に供したる事でありますが爾後秋蠶の狀況に就ても御遠或乍ら時々御報導に預りたい旨を知り味方を知るは戰爭の秘訣彼我の狀況を詳にして以て蠶絲業經營の上に於て圓滿なる結果を見たいと思ふことでありますから萬障御繁合の上左記の項目に就て續々御報導あらんことを切望致します

一夏秋蠶桑園の狀況　一夏秋蠶用桑葉の價格　一生種若くは黑種の各種立增減　一各齡の經過　一其他參考となるべき者

## 本報の編纂に就て

本報の發刊は本會の爲でもなければ又會員諸君の爲でもないツマリ蠶絲業の改善發達を圖りたいといふのが其目的であるが然れども本會殊に會員諸君の希望以外に立ちては到底其目的の遂行を期する譯には行かない故に本報は可成會員諸君の希望に副ふやう編纂しては居りますが併し編者の不敏なる常に其及ばざらんことを慮れつゝあることでありますが故に會員諸君にして本報編纂上に對し何か御意見がありますならば忌憚なく御申越下されたい悉く諸君の御希望を容るゝことは出來ないでも出來得る丈け最大多數の御希望に應じて編纂し以て本報發刊の目的を貫徹するやう努力致したいと思ひます希くは本報愛讀の士は都て其希望のある處意見の存する處を御通知せられたい

故大日本蠶絲會副會頭農學博士酒勾常明君

Feu Monsieur T. Sakoo, Sous-Directeur Général de notre Association.

大日本蠶絲會報　第貳百八號

# 桑の代用植物

學藝委員
理學博士　佐々木忠次郎

## 柘で飼つても斃れずに結繭するやうになる

蠶兒の常食は桑葉であるから桑葉がなければ蠶兒を飼育することが出來ないやうに考へらるゝけれども、清國では桑葉の外柘（清音ツァ俗に「ハリグワ」と云ふ）で以て蠶兒を飼育して居るところがある、即ち柘葉のみで蠶兒を飼育するものもあれば、或は蠶兒の三齡頃までは柘葉で飼育し、後の二齡（四齡及五齡）は桑葉で飼育するものもあるし、柘葉のみで飼育した處の蠶兒の種であるならば、之より孵化し出てたる蠶兒は能く柘葉を食つて良好の繭を營むものである、而して本邦在來の赤熟とか青熟とかいふ蠶兒に柘葉を給與する時は、初め一二年の間は鬼角繭の多きを免かれないけれども、其生存したる蠶兒の種を採り翌年に至り、之より孵化し出でたる蠶兒を再び柘葉で飼育し、之を數年反復するときは遂には柘葉に慣れて繭を營つても斃れないで結繭するやうになるものである、清國人の說に據れば、柘葉にて飼育したる蠶兒の繭より製したる生絲は、其質頗る强靭であると云ふことであるけれども、余が嘗て柘葉で飼育した日本蠶兒の作つた繭から製した生絲は、普通の生絲に優ることを認めないのである但し翌年桑葉に於ては如何なる結果を來すものであるか、夫れは今より豫知することは出來ないのである。

## 柘と蚍害とは如何なる關係を有するであらうか

柘葉で蠶兒を飼育すると蠶蚍の寄生を受くることが極めて少れである、之れは如何なる譯であるかといへば蠶蚍の蟲は桑葉には產卵することを知つて居るが、柘葉には產卵することを知らないからであらう、併し別に柘園を設けずに桑園の內に點在柘を植込む場合に於ては蠶は柘葉を桑葉であると誤認して之に產卵することがある、斯る場合には柘葉で蠶兒を飼育しても蚍の害は到底免れないであらう、夫れて柘を桑樹

の間に植付るが特別に栽培を設け其桑葉を蠶兒に給與すれば蠶兒は蚋害を受けないのであるから本邦の如き蚋害の甚しき所では蠶兒の四齡以後桑葉を飼育するとしたならば大に蚋害を免がれるであらう、此點に就きては將來大に研究すべき事項であらうと思ふのである。

## 「ハルツ」氏の試驗「キバナパラモンジン」の代用

双鴛邊の「ハルツ」と云ふ人は、一千八百八十六年乃至一千八百八十八年の繼續試驗に依り、桑葉の代りに所謂「バナパラモンジン」(Chrysanthemum Indicum)を給與し、遂に成繭せしむることが出來たといふのである。余は嘗て鵜邊に遊ぶた時、親く其蚕を視たのであるが、桑葉に飼育したる蠶兒の繭と殆ど同一の性質であることを認めたのである、しかるに「ハルツ」氏が桑葉以外の植物で育蠶することを掛るや否やを試驗するに至つたのは、鴛邊は冬日の寒威極て酷く、爲めに桑樹を植付くるも低溫の爲め枯死するの恐があるからで、此寒威に堪ゆる「キバナパラモンジン」で育蠶するとが出來なら、利益が多からうとの意見を抱いたからである、左れば桑樹の之れに適へる土地に於ては「キバナパラモンジン」を栽培して蠶兒を飼育する必要は毫も認めないのであるけれども、「キバナパラモンジン」を蠶兒に給與して蚋害を免がるべしとの事柄に就いては讀者諸君の熟考を煩はしたいものである。

---

# 乾繭の要旨は繭層をして常に乾燥の狀態にあらしむるにあり

過常會員
蠶業講習所教授　服部柳太郎

昔支那の白樂天、抗州の知事たりし時、烏窠道林禪師に就て、佛教とは如何なるものであるかと教を請ふた、禪師答へて曰ふには「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」と、大學者である白樂天に對しては、餘りに平凡な答方であるから、白樂天も嘲笑した、禪師嚴然として、三尺の童子も能く知つて居ると、不平らしく訴へた、禪師曰く、三尺の童子能く言ふも、八十の老翁之を行はず、知何に其理玄妙なりとも、實踐なくんば、其の佛教に非ずと、教へたといふことである。佛教既に然り、現て蠶々の事業に於ては、尚更のことである、手の舞ひ足の踏むべき桑葉に近しして然かも實益に富む事務多きを忘れ、兎角實行に怠くして且つ實利に薄き、新奇の事柄を喜ぶ弊あるは頗すべきことはなかに三尺の童子も主旨すべき事柄であつて、猶且つ愛々たる大製絲家が、捨て、顧みざる實例を、舉掛げて以て、我が製絲界に如何に遺憾多きかを述べて見よう。

## 上簇室の濕潤と梓角の固着



蠶が繭を吐くに臨んで、程よく乾燥すれば、繭と繭と粘着して、乾燥する部分が寡いから、解舒よき繭が出來るのである、蔡繭中空氣が濕り勝ちであつて、一度に乾燥すれば、生繭が揚返の時に、梓角の固着して、生繭が大なる、板の如き繭となり、爲めに著しく解舒を悪しくするのである、繭が出來たといふのであるが、余は嘗て鵜邊に遊ぶた時、親く其蚕を視たのであるが、桑葉に飼育したる蠶兒の繭と殆ど同一の性質であることを認めたのである、しかるに「ハルツ」氏が桑葉以外の植物で育蠶することを掛るや否やを試驗するに至つたのは、鴛邊は冬日の寒威極て酷く、爲めに桑樹を植付くるも低溫の爲め枯死するの恐があるからで、此寒威に堪ゆる「キバナパラモンジン」で育蠶するとが出來なら、利益が多からうとの意見を抱いたからである、左れば桑樹の之れに適へる土地に於ては「キバナパラモンジン」を栽培して蠶兒を飼育する必要は毫も認めないのであるけれども、「キバナパラモンジン」を蠶兒に給與して蚋害を免がるべしとの事柄に就いては讀者諸君の熟考を煩はしたいものである。

岡山縣下郡郡出生所所在上簇室乾燥組織左圖參照

あつては、夫れこと三尺の童子の知るところを、八十の老翁之を行はずである、高慢ほど事業の改良に害あるものはあまい。

## 手近き實例を何故應用ぬせか

上簇室の濕氣が、著しく繭の解舒を害し揚返室内の濕氣が、總て繭に實驗したなら、必ず亦、生繭揚返より乾燥時に至るまで、繭に濕氣を與へて、絲皮を溶解の狀態あらしめ、再び之を結着し乾潤を害することに就き、如き愚は、避ければならぬ、生繭を堆積して直接に蒸氣を繭に觸れしめて、殺蛹する場合、天日乾燥を施す場合、直接に蒸氣を繭に觸れしめて、殺蛹する場合、繭を半乾燥して繭層を温潤せしむる場合に、解舒を悪しくすることは、其事情は各〻異なるも、其原因一つであつて、上簇室の濕潤や、揚返室の濕潤に於ける場合より、推察し得らるるものである、製絲家の大部分が、之等に對して無關心に看過するのは豈愛基暗しである、養蠶家に向つて上簇室の乾燥を責めながら、自からは手近き實例を利用し得ぬのである。



蠶が繭を吐くに臨んで、程よく乾燥すれば、繭と繭と粘着して、乾燥する部分が寡いから、解舒よき繭が出來るのである、蔡繭中空氣が濕り勝ちであつて、一度に乾燥すれば、生繭が揚返の時に、梓角の固着して、生繭が大なる、板の如き繭となり、爲めに著しく解舒を悪しくするのである、繭が出來たといふのであるが、余は嘗て鵜邊に遊ぶた時、親く其蚕を視たのであるが、桑葉に飼育したる蠶兒の繭と殆ど同一の性質であることを認めたのである、しかるに「ハルツ」氏が桑葉以外の植物で育蠶することを掛るや否やを試驗するに至つたのは、鴛邊は冬日の寒威極て酷く、爲めに桑樹を植付くるも低溫の爲め枯死するの恐があるからで、此寒威に堪ゆる「キバナパラモンジン」で育蠶するとが出來なら、利益が多からうとの意見を抱いたからである、左れば桑樹の之れに適へる土地に於ては「キバナパラモンジン」を栽培して蠶兒を飼育する必要は毫も認めないのであるけれども、「キバナパラモンジン」を蠶兒に給與して蚋害を免がるべしとの事柄に就いては讀者諸君の熟考を煩はしたいものである。

---

過常會員
蠶業講習所教授　服部柳太郎

昔支那の白樂天、抗州の知事たりし時、烏窠道林禪師に就て、佛教とは如何なるものであるかと教を請ふた、禪師答へて曰ふには「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」と、大學者である白樂天に對しては、餘りに平凡な答方であるから、白樂天も嘲笑した、禪師嚴然として、三尺の童子も能く知つて居ると、不平らしく訴へた、禪師曰く、三尺の童子能く言ふも、八十の老翁之を行はず、知何に其理玄妙なりとも、實踐なくんば、其の佛教に非ずと、教へたといふことである。佛教既に然り、現て蠶々の事業に於ては、尚更のことである、手の舞ひ足の踏むべき桑葉に近しして然かも實益に富む事務多きを忘れ、兎角實行に怠くして且つ實利に薄き、新奇の事柄を喜ぶ弊あるは頗すべきことはなかに三尺の童子も主旨すべき事柄であつて、猶且つ愛々たる大製絲家が、捨て、顧みざる實例を、舉掛げて以て、我が製絲界に如何に遺憾多きかを述べて見よう。

## 上簇室の濕潤と梓角の固着



上簇室の濕氣が、著しく繭の解舒を害し揚返室内の濕氣が、總て繭に實驗したなら、必ず亦、生繭揚返より乾燥時に至るまで、繭に濕氣を與へて、絲皮を溶解の狀態あらしめ、再び之を結着し乾潤を害することに就き、如き愚は、避ければならぬ、生繭を堆積して直接に蒸氣を繭に觸れしめて、殺蛹する場合、天日乾燥を施す場合、直接に蒸氣を繭に觸れしめて、殺蛹する場合、繭を半乾燥して繭層を温潤せしむる場合に、解舒を悪しくすることは、其事情は各〻異なるも、其原因一つであつて、上簇室の濕潤や、揚返室の濕潤に於ける場合より、推察し得らるるものである、製絲家の大部分が、之等に對して無關心に看過するのは豈愛基暗しである、養蠶家に向つて上簇室の乾燥を責めながら、自からは手近き實例を利用し得ぬのである。

## 絲皮の性質

前述の如き自明の理に暗るきは、愚ムに絲皮の性質を、充分に了解し得ぬが爲めであらう、凡そ製絲法の骨子を知ること、始めより、繭が生絲となり、生絲が綿となりて、織物と原料に供せらるゝまで、始中終作用するものは絲皮にてある、皮とも云ふべき絲皮は、精練するに依りて遂に取り除かるゝものであるが、夫れ故に其性質に適合する樣に仕事を重要のものであるが、夫れ故に其性質に適合する樣に仕事をすれば、斯樂が完全に成し遂げられたのである、之に反して其性質に逆ふ取扱をすれば、損失を蒙るのである、抑絲皮なるものは水に逢へば溶解する、而して温度が高いと一層溶解し易い、則ち熱湯で煮て流繭し、温て練絲する所以である斯樣に絲皮が溶解して再び乾燥すれば、糊狀に固着するから、則ち數條の絲糸が一條の生絲に施合さるものである、絲皮の溶解性と粘着性を理解して、生繭の取扱より、乾燥、貯藏、繰絲、揚返しに至るまで、萬事に注意することが製絲法の骨子である、而して乾繭業務は製絲業の全體ではない、繭の解舒は、如何に繭の解舒が、製絲の勝敗は、乾繭の一事に依て左右せらるるものであると断定が出來るのである。

## 乾繭器の良否は通風の良否により て定まる

乾繭は、繭層を湯潤し再び乾燥すれば、甚しく解舒の悪しきものとなることが了解出來る、隨て乾燥繭中に湿氣が殘れば、繭層が、鑵詰貯藏、又は生子板張りの貯蔵庫を作りて、密閉貯藏を寄さに至れるは、一大進歩といはねばならぬ、斯の如く貯繭中の吸湿が、恐るべく了解されたなら、又進んで、繭就業中の通風不完全なる乾燥器が成蛹悪しく、繭を二段も三段も積み累ねて乾燥するときは成蛹悪しきが如きは、斯の如き丸易き道理や、手近き實例を知りながら、通風不完全なる乾繭器を据付けて居るが、如き愚も亦極まりてはなしかと、我邦は之に等しく多くの實例より推察して、乾繭器には必ず所謂西ヶ原式通風裝置を採用すべきことを常に主張し來つたの通風裝置は、東京蠶業講習所講師齋藤孝氏の發案である、齋藤孝氏が斯樂に從事するものは大に感謝せねばならぬ事である、我邦の最も進歩せる乾繭器の最も進歩せる乾繭器は、實に之を以て乾繭器の最も進歩せる乾繭器が林式の乾燥器である、林式が得たる效驗

はない、胸部と尾部に於ける分布は少しく複雑してあつても仔細に之を檢すれば又中央胴部と同一の關係であることを知ることが出來るのである。

筋肉の詳細は拙著蠶體解剖生理論に詳述しやうと思ふが他の昆蟲類に於ては未調査せられたものがないでもないが蠶のものとは頗る相違して居ることを見るのである、世の蠶體解剖生理を學ばんとする士は幸に之に依りて更に研究の歩を進めらるゝの資と爲す事が出來れば予の研究も亦從勞でなく余の研究は之れが嚆矢と爲すことが出來るであらう、尤も

第八圖

蠶の神經分布と筋肉との關係

（原圖無斷轉載を禁ず）

ら、本論には神經分布と直接關係を有する主なる體皮筋肉と神經分布の關係を研究記載したものがないから恐らく余の研究は之れが嚆矢と爲すことが出來るであらう、尤も

いゝことになるのである。

（一）幼蟲の部

第八圖は筋肉間に分布する神經の狀態を描いたものである、右側は內面より見たる筋肉の全形を示し、左側中胸部は背腹



共に縱走筋及び其他上側筋肉の一部を去りたるもの第四環節腹面は縱走筋肉、斜行環節筋及び斜行環節筋等を除き去りて最も皮膚に接近せる筋肉のみを渡節筋肉等を除き去りて背面は縱走筋及び環節筋を除いたもの、第五環節腹面は縱走筋肉及び環節筋を除き、背面は縱走筋肉と環節筋一部を除いたもの、第六環節は背腹共に縱走筋肉のみを除いたもの、第七環節の腹面は全形にして背面は縱走筋肉のみを去つたもの、第八環節腹面は內面上部筋肉のみを殘したもの、第九環節腹面は內面上部筋肉のみを殘したものであつて背面は全形である、第九環節腹面も第八環節腹面に同樣に關係ある筋肉のみを殘し、背面は縱走大筋肉と縱走小筋肉の二者を除いたものである、第十節は特に斜行渡節筋肉を現し、第十二節は第十節と同じく斜行渡節筋肉を現し、第十二節は第十節と同じく斜行渡節筋肉を現し、第十二節以上の筋肉は其全體重要なるものを存せしめたものである。

第十節以上の筋肉の各部を示し、神經を分布せしめたものである。

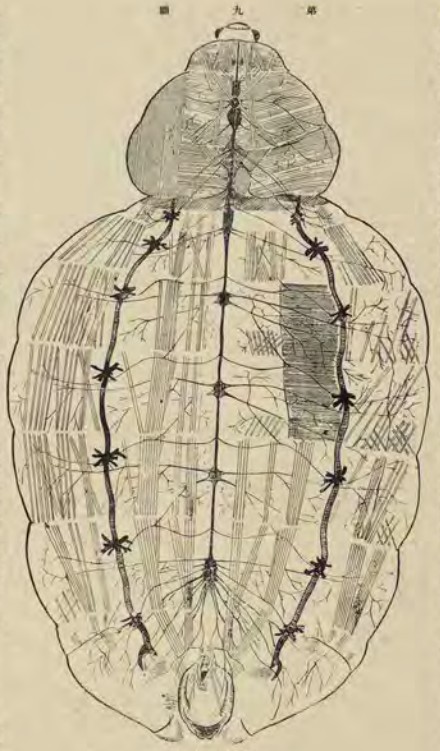
前述の如く筋肉の各部を示し、神經を分布せしめたから圖に依て其關係を知ることが出來るであらうけれども左に簡ほ大要を說明しやう。

前腦より出づる神經中、消走するものは上唇の基部に於て分岐し、上唇の筋肉中に分布するが、縱走するものは食道の上部に沿ふて降り、食道及び胃の下部に於て六、觀降し、上顎筋肉と筋肉の間を通過し、單眼の下部に於て分岐し、各分枝は太くして上顎筋肉と筋肉の間を通過し、觸肢の先端に附着して居る、觸肢は二節の下顎鬚、細腦の先端に附着して居る、觸肢の基部に於て數多に分岐し、上唇の兩端、基部に於て數多に分岐し、上唇の上部に相並んで縱走し、觸肢筋肉の上部に於て分岐し、上唇神經は赤上顎筋肉の間を通過し、觸肢筋肉の下部に於て分岐し、觸肢の腹面環節中に至りて各分枝に分岐する、上唇神經は前腦神經の基部に於て分岐し、上唇の筋肉中に分布するが、縱走するものは食道の上部に沿ふて降り、食道及び胃の下部に於て六、觀降し、上顎筋肉と筋肉の間を通過し、單眼の下部に於て分岐し、各分枝に分岐する、上唇神經は前腦神經の基部に於て數多に分岐し、上唇の兩端、基部に於て數多に分岐し、上唇の上部に相並んで縱走し、觸肢筋肉の上部に於て分岐し、觸肢の腹面環節中に至りて各分枝に分岐する、上唇神經は前腦神經の基部に於て分岐し、上唇の筋肉中に分布するが、縱走するものは食道の上部に沿ふて降り、食道及び胃の下部に於て六、觀降し、上顎筋肉と筋肉の間を通過し、單眼の下部に於て分岐し、

に於ては次環節の上部神經枝と細枝を以て互に連絡するのである、第十三球より出づる交感神經絲は其だ細く、而して尾なるものである。

網狀交感神經は腹部交感神經の開點と、次球との間にあり

第九圖



蠶蛾の神經分布と筋肉との關係

方に至る縱走大神經絲に沿ひて下る退化神經であつて、基部は明かに之を認め得ても稍末に至れば殆んど認め難いやうにて、斜行渡節筋肉の下端上側に存するけれども、前肉とは直接關係ないやうである。



神經球の上側より出づる上部神經枝は、腹面及背面共に縱走筋肉及環節筋肉の下面に分布する神經である、即ち腹面縱走渡節筋肉の上側を通過して、直ちに腹面大縱走筋肉の下面に入り、此ところに於て一の大分枝を出し、環節筋肉の間に分布するのである、而して其本幹は氣門の裏面縱走管上を通過し、背面小縱走筋肉の上を通り、直ちに背部大縱走筋肉の下面に入り、背面交感神經、其他二三の大分枝を出して、末節筋肉其他以下皮膚に接近する凡ての筋肉間に縫ひ入り、末梢は筋肉渡節筋肉及皮膚に終るのである。

下部神經枝は縱走環節、渡節筋肉等の最下部即ち最も皮膚に近く分布する神經枝であつて、腹面基下部の小筋肉及脚の基脚中一體に分布すると圖中第四環節左側に見るところの如くである、前述の如く此神經分枝の一本は、腹部交感神經に連絡するものである。

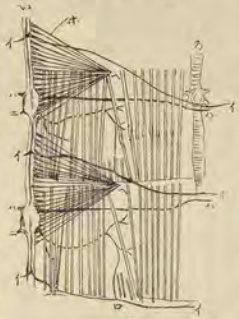
第十二球及第十三球の上下部神經枝さては、右と同一の關係を持つて居るけれども、大縱走神經絲の變形せるものは圖の如く生殖器直腸、肛門の周圍其他背腹面筋肉間に分布するのである。

## （二）成蟲の部

成蟲に於ける神經分布と筋肉の關係も大體に於て幼蟲のものと異るところはない、即ち一般の方則に依り、一上部神經枝は、腹部縱走筋肉の下面から出でし、縱走筋肉及び環節筋肉の上面を、横走し、背面大縱走筋肉の下面を通過し、氣門の下面に分布する。二下部神經枝は、腹部縱走筋肉及び環節筋肉の上面を、横走し、背面大縱走筋肉の下面を通過し、氣門の下面に分布する。三下部神經枝は、腹部縱走筋肉及び環節筋肉の下端に至り、横走し、背面大縱走筋肉の下面を通過し、氣門の下面に分布する。

蠶蛾の神經分布の研究

第十圖



蠶の腹部脚骨狀神經

三下部神經枝は最も皮膚に近く、主として腹面に分布する。四腹面交感神經は、筋肉の最下部に横走し、氣門の表面を横に環繞し、背面上唇に至り、微かに分岐して分布する。五腹面交感神經絲と上部神經枝とは、腹部肉の間に於て連絡する。六上部神經枝とは、腹部肉の間に於て連絡する。

以上の如く分布するけれども、蠶蛾の胸部は幼蟲と異り筋肉著しく發育すると翅及脚の發達にて一變化を來すとを以て、神經枝も亦よく發達して筋肉間に分布し、一部は翅及脚に走入する、第三胸内に存する退化神經球よりは發生せるものへ第一環節に分布し第二退化神經球よりは第二環節に分布する、分布の狀態は法則によりて異することはない、從來神經枝の分布は神經球所在の環節に於てするとの説

を常とするけれども、成越に至る間胸部に於て神經球の合同を爲すが爲め、球の位置と神經絲の位置に異動を來したものである、同理に依り末端神經球は幼齢時代に比し、更に一球多くの合同するから、最下球より出でる神經絲は何れも退化せる環節即ち生殖器の周圍に至て分布するものである。

蓋蛾には蓋兒時代の如く網狀なる腹部交感神經が無い、然れども扇骨狀を成せる多數の神經を出し、先端相集り腹部交感神經に集まる、此神經は腹部各節共に存在し、加かも多數のものである、愚ふに該神經は幼蟲時代に於ける網狀交感神經の發達せるものであらう。

扇骨狀筋肉は第十圖の如く筋肉の上部に起り、後方は神經球に附着する。

扇骨狀筋肉は腹部交感神經の下位にあり、前方は腹部交感神經の上部に起り、後方は神經球に附着する。而して其端相合して下部神經と交感神經の接合部の後方に附着する。

臺灣の天蠶

在臺灣小川源平氏より青島理事へ寄せられた書簡の一節に次の如き記事がおりましたに讀者の御參考まで

前略本島に御承知の如く未だ何等蓋業の見るべきものの無之候へども筆て佐々木輝士の御慫力により天蠶試育開始本年春開育し得ることゝ為候に付明年度は稍々規模な大に試驗致度心組居候又野蚕の狀態よりすれば蓋業美大に見込るべき無無に付設立者賛助の工夫致度存し如何なる形式に出づべきか誠に土人相手の事故明家も無之苦心救易候哉々

# 製絲業經營の方針（承前）

農商務省技師 松下憲三郎

## 資本的組織の研究

### （三）會社組織

工業の組織が大なるに從て大なる資本を要する如論のことと歐洲諸國に於ては或る論者は此大々的資本を見て總ての生產は資本によらざるはなし、勞力も資本によりて購求せられ、工場も機械も凡て事業を經營するの要素は資本なりと極論し、遂に有名なる資本主說を生じた位である、換言すれば個人の所有財產又は單獨信用のみに起因して設けらるゝものは到底巢業し得べからざる巨額の資本を必要とする場合に於ては、各々自己の資本を以て經營するの要素は資本なりと極論し、遂に有名なる資本主說を生じた位である、換言すれば個人の所有財產又は單獨信用のみに起因して設けらるゝものは到底巢業し得べからざる巨額の資本を必要とする場合に於ては、各名會社、合名會社、合資會社、株式會社、合資會社、株式會社、合資會社、株式

# 乾燥の方法及其原理（承前）

東京帝國大學工學部講師 小松豐作

## 理論と實地と違ふ筈はない

さて前號に記載した計算上から割出した、實地試驗上之に相當する熱量はたつた一割二分内外であるのに、實地試驗上之に相當する熱量は八割九割であるから其差が甚だしい、然し理論と實地とは違ふ道理はないから其差があるには其れだけの由がなければならぬ、前號に掲げた計算上の空氣量は方程式上の代入數値から適當の量を割り出したものであるのに、普通の乾燥室の構造は多く自然の通風に依せるから、室内の空氣は濕氣を含むと含まざると拘らず、容赦なく自然の流れに伴ふて室外に放散し、進へず新陳代謝するのである、從つて理論上必要なる空氣量の何倍と云ふ量が熱量・室及乾燥室を通過するのである、從て無用に消費される熱量は馬鹿々々しく多くなるのである。

## 實地の場合でも被乾燥物を收容した當座は無益に消費される熱量は比較的尠い

乾燥器の被乾燥物を入れた當座は、いくら勉めて傳熱裝置を働かせても室の温度が伸々登らないは實驗したもの、等しく知るところで、室の温度が登らんだけ有効に消費する熱量が多い事が列る譯である、熱氣室を出て行く空氣の温度は高くも、彼乾燥物の持つて居る水分量が多いから、熱量を吸收して蒸發する水量も從つて多い、言ひ換へれば熱空氣の温度山と排氣の温度ロとが差が甚だ多くなるので、從つて有効に消費される熱量が多い譯である。

## 熱の損は全乾燥に近くに從て多い

全乾に近くに從て被乾燥物の持て居る水分量は次第に減少する、で前にも論じた通り水を蒸發するには多量の熱を要する、其多量の熱を吸收す可き水分の量が甚だ少い上に乾燥器の傳熱裝置は最初から隱性で相當な加熱力を持て居るから、サー茲ではいくら温度を低下させ樣と計つても温度はどんどん登つて來る、又普通の通風の量も加減しないの理論上必要でない空氣を熱する事が多くなる、言ひ換へれば熱氣の温度山と排氣の温度ロとは其差が甚だ掛くなるのである。

## 熱の損德は左程意に介するなかれ

熱の損德は燃料の經濟問題で、何事に限らず經濟を計るのは良いけれども、鋼の如き高價にして經濟の主要の部分を占む可き、原料の乾燥に於ては勿論、單に燃料なだけでも温度は考へる迄がない、鋼貫に及ぼす影響の如何が緊要問題である事は言ふ迄もない。

## 通風の良否と乾燥の速さとはどんな關係があるか

前に段々述べた事から押して見て通風を良くする、即ち乾燥室内の換氣を盛にすると熱損を生ずる、即ち不經濟である、之は意に介ない事として、次に通風の良否が乾燥の速さに如何なる影響があるかと云へば、列論乾燥室の方が通風の悪い乾燥器に比して、乾燥し力が速い、其は物理學を嚙つたもの、又實地乾燥をした人々の經驗に照らしたものである、これ一概に通風さへ良ければ乾燥が速いかと云ふにそうはいかない。

構造如何、特に排氣口の位置如何によつては熱氣が乾燥室内を移動する狀態に多大の關係がある、して又是れが乾燥の速さに掛からず關係を持つて居る事と考へられる之は後に詳論する事としやう。

## 通風の良否にも自ら程度がある

乾燥器は普通室に相應した傳熱裝置を有し、放熱力も制限のあるものであるから、通風の度にも自ら制限がなくてはならない、乾燥器不相應に通風を掛けると却て乾燥力を甚だ減くする、何となれば空氣量が法外に多くなると、熱氣の温度即ち山が甚だ低くなるからである、又時によると只乾燥室の温度を高めさへすれば乾燥を速にする事が出來ると云ふ樣な大間違ひな考へを持つて居る人がある、それは一昨年僕が三重縣下へ行て實つた事がある、其製絲所に設置してある乾燥器を見せて貰つた事があるけれども、排氣裝置がないから乾燥器は吸氣裝置はあるけれども、

理屈に符合しない事を說いた、ところが說明の任に當りたる先生が僕の言を排して曰く、

「スベて、物を乾燥するには温度を高めれば良い、排氣の裝置など無味のない事は僕は（）難であつたが幸に其乾燥器には天井四尺が、隙間が多かつたから從つて機論する必要も認めなかつた。

## 田舍の婆さん眞理を解く

昨年僕が鄕里に歸つて居つたとき下女が赤ん坊の「シンメ」の密封式乾燥を見て居るのを見た、僕の鄕里は寒國であるから、冬になると此燈がある、之れは嚴冬野外霧雪の出來ないときに、一家團欒の良い中介物であるが、雨天のときなどには赤ン坊のある家では之を乾燥器に使用するのが普通である、下女が叱られたのはどうしたかと云ふと「シンメ」を炬燵機の上に並べて之を厚い布團を掛けて密封したのであつた、所謂通風を吐絕した樣なものである、すると婆さんの曰く「シンメ」を掛けたら布團の端を摩げて置かんとかんと、すつかり布團で被ふて仕舞ふと、布團に閉じて湯が付く上に「シンメ」の乾きが悪いよと、僕は、彷に閉じて湯が付くと云つたが、はあ、婆さん眞理を解くわい、三重の製絲家よりも餘程えらいわいと感服した。

## 乾燥の速さは繭質に如何なる影響を及ぼすか

前々から論じたところによると乾燥の速さは室内温度と通風の良否によつて左右せられる事が多い事は別つたけれども之が繭質に如何なる影響を及ぼすか失等未だ信を措くに足る程の實驗調査をしたのはなく、未知に屬する事項が多いから、現在相當の設備をなし精細調査する積りで居るけれども、東京蠶業講習所では今迄の經驗上では華氏百八十度乃至二百度の間で、八時間乃至十二時間かかつて全乾燥したものが最も良好であるとしてある。

## 乾燥室の中の氣流の狀態はどんなものであらうか

乾燥室の中で生ずる氣流の狀態は單純なものではなく、之を吟味する事は乾燥器の考案上及び乾燥物の取扱上にも有益の事と考へる。乾燥器の種類構造等に至つて略々氣流の大傾向だけは推定が出來るけれども、氣流の全部が同じ徑路をとり、同じ傾向を持つて居るかと云ふに、そうでは無いと思はれる、言ひ換へれば分流せる氣流があると思はれる、以下順を追つて次第に吟味しやう。（未完）

演壇

# 蠶業經營方法

學藝委員
農學博士　大森順造

本編は岩手縣農會のために演說せしものゝ大意なれども一般讀者の參考となるべしとて特に博士より寄せられたるを茲に掲載することゝなつたのである。

私は本日諸君に申上げたいのは即ち蠶業經營法の事であります。

此事は御當縣に取りましては最も必要なる事で御座いましまして、私も是迄二三回も意見を發表した事もありますが、然し一人でも多く聞いて實行して貰ひまするれば、それだけ縣下蠶業發達上利益あることでありますから、今日亦繰返して御話する事に致します。

私は此地に參りましてから七年になります、私の參りました時分は北條知事時代でありまして、御當縣は蠶業も勃興しかけて居りました、北條知事に向て私の意見を披瀝したことも數回あります、其意見を採用になつたも、又は採用せられなかつたこともありますが、中には既に實行せられたるものもあります。



## 經營の方法が惡るい

以來私は御縣下の處々の狀況を耳にし、且つ注目しましたが、如何も勃興の氣運には向つてゐるが、經營方法は惡いと思はれる、其當を得ざれば、決して終りを全うすることは出來ない、何事に限らず經營方法は最も大切である、經營方法と技術と兩々相俟て始めて完全なる事業となるものであります。

## 土地は善いが富の程度が低い

で第一に本縣に於て眼についたのは富の程度の低いことである。私は方々歩いて見ましたが比較的貧乏者は澤山ある、金は不足して居る、其第一の證據は日露戰爭の際國債を募つたが、應募者は非常に少なかつたことです、本縣は面積は非常に廣濶であつて而して貧しい、之れは取るべき金を取らないで置くからです。

新潟縣東蒲原郡立農林學校蠶室の景

## 信州には政治で飯喰ふ者が尠い

熟々本縣の狀勢を見るに地勢及び氣候等に於ては、信州によく似て居ります。信州等の有樣を見ると本縣などよりは教育は能く普及して居る、即ち程度は進んで居る、學校も完備して居る、殺菌も宜しい、同じく交通不便な山國であるのに如何なる理由であるせうか、之は全く養蠶の爲である、信州に於て養蠶なかりせば斯の如く進んで居らないのであります彼等は種紙を賣る方々に出る、種々なる人間に觸れる、揉まれる、斯くして非常にすれた人間になるのである、又一方から見れば彼等は農民として奢侈の國、名譽の國です、一寸農民の家に行つても、農民と思へぬ程立派な茶や菓子を出し、洋酒、舶來小間物など盛に賣れます、斯の如く生活程度も高い、之は相互に蠶を飼つて金を澤山取るからである、山奥の國で海に遠い非常な交通不便の土地にして、斯かる狀態であるのは普養蠶の賜である、此事は決して我田引水論ではなく誠も云ふ事であります、併しながら決して金錢ばかりつて居るものではない、彼等は自己の勞力をなし進んで穫得す、故に非常に鼻息は荒い、何も私共は役につかなくとも宜しうございます私共は蠶を飼つて行けば宜しい」と云ふ樣な譯で、獨立自營のるのである、斯くの如く財產は平均して居る、故に非常に鼻息は荒い、何も私共は役につかなくとも宜しうございます私共は蠶を飼つて行けば宜しい」と云ふ樣な譯で、獨立自營の

物質は充滿して居る、騒動等にあつても彼等は蠶業上忙しい時は決して出ない、今日は仕事は忙しいから行かれませんと云う様な理で、政治なとで飯を食うなとと思ふる者は決してないと云ふ事であります、いや少ないのであります。

## 財産の平均農村の發達

之れは何故であるか彼等は實直なる業務を持つて居るからです。又各自の財産は均しく政樂上より見れば比較的白い現象であります、教育も充分に普及し、且つ人間も純實であるが故に、何か議論でもあれば非常に雷しい、之れが信州に於ける農村の有様である、實に嬉しいものである、同一なる資産を持つて働くには非常に結構な事であります、農村として健全なる發育をなしたる者と云ふ可き者である。

## 土地は勿體ない程無駄になつて居る

斯の如き狀態の國を見て而して本縣に來ると實に異なつた事は澤山あります。山來東北の地、原野廣漠に、而も殖産等は多くして農業は集約に行はれて居らん、西南地方では土地は狹く、非常に集約に行はれて居る、此ちらに來て見ると實に勿體ない程土地は無駄に使はれて居る、斯の如き土地は我が蠶業經營するに、最も都合がよい、長野の如き廣漠なる原野を利用して蠶業に如く者はない、斯の如き廣漠なる原野を利用して蠶業に如く者はないと思ふ。

## 我田引水論ではない

私は本縣に參つてから水産の統計も取つて見た、畜産の統計も取つて見た、而して北部知事にも種々話しした、如何しても養蠶に越すものはない、強ち之れは我田引水論ではありませんが、産馬事業の如きは能く人の云ふ處でありますが、所謂國家事業であつて、決して養蠶位農村を利するものはありませんが、之に於てか私は蠶業の必要を絶叫する所以であります、之れは如何しても本縣に於てはやらんければ成らんのであると信じます。

## 流行を逐ふて經營したら間違ふ

前に長野の例は出ましたが、實に長野のごときは如何な山奥でも智識は進んで居ります。而して交通の不便な點に於ては能く本縣と似て居て、現に長野に於ては越後に通ずる者、上州に通ずる者だけだ近來は松本にも通じましたが、元來交通の不便なる點は本縣と同じ境遇であります、斯の如く山國であるから立派な材木は澤山ある、然らば林業は如何、今此處に澤山ある材木があるとは、之れを輸出するには、幾何か費があるか云ふに前述の如く非常に交通は不便なるが故に、多額を要するが爲め利益は少ないのであります、故に論と林とは此點になれば至て重量が輕くて一番よい迚も林業等の及ぶ處であります。

信濃も越後との境の所には山林ありて立派な林は非常に繁



茂して居る、然れども運搬の都合上之を常に伐採して運搬する事は出來ん只だ冬季に於てのみであるとの事であります、抑も事業を經營するには能く熟考した上でなければ出來ない、流行を追ふて事業を經營するなどと云ふ事は間違つたことである。

## 蠶を貧乏蟲とは思切つた話

養蠶に於ても同樣だ、人が蠶を飼つて金を儲けた、そこで自分も一つ金儲けしてやらうと云ふ樣な考へて、何等の經營の方法や學問技術なくてやつては直に失敗する、斯の如くに貧乏に成つた例は幾らもある、私は方々に行つて養蠶の話を話しますが、處に依ると飛んでもないことを云はれることがあります、あなたは幾ら利益があると云ふても駄目です、彼れは貧乏蟲だ、學問より恐ろしいものだ、などと思切つた事を云ふ、其處で段々話を聞いて見ると、實に無鐵砲な事をやる、隣の家さんは半板か一枚を飼育して四五十間儲けた、其處で無暗に慾張つて深山儲けてやらうと思て、水業を止めて大仕掛に養蠶を始めた、忽ち失敗して仕舞ふた、之れ無鐵砲な事をするより來る結果であります。

## 蠶業の經營は派手な事が大の禁物

蠶業の經營の如きは決して斯樣に簡單な者でない非常に複雑な者だ、如せ上つては迚も駄目です、本縣に於ても勿論、蠶業は興して來ました、桑園の如きも、既に一萬町歩以上に成つて居ります、故に蠶業經營の方法は、必要である、然らば蠶業經營の方法は如何にすれば良いか。

蠶業經營に於ては派手な事は、大禁物です、地味な所謂醇乎たる事が必要です、桑園を作つたら人造肥料を施す事より、可成肥料を刈敷に使用する事が必要です、桑園の肥料にする樣でなくちやいけません、釣合の取れる樣にせざれば成らん、頭ばかり立派にやつても土臺が固ならなければ決して甘く行かない、即ち自分の手で出來ることだけ行ふ事は必要です、一枚なり半枚なりで出來ることは、いくら人數と桑とに依つて同一育しなくては成らん、今一村の中の人が毎戸一枚なり半枚なり全部同一育すれば、其一村は非常に産額に於て多くなる、故に非常に多く飼ふものは少ない、少しづゝ皆飼ふから斯く偉大なる産額に達する者であります、此盛岡の如きも大養蠶をなし失敗の歴史を持つて居る、何も六ヶ敷い事はない、自分の手で間に合ふだけ調へば宜しいのです、それで日本の蠶絲業は成り立つのである。

## 冬期四ヶ月間を炬燵で暮らすは惜い

蠶業と勞力との釣合を取るのは經濟學上最も重要な話で本縣の如きは各々非常に長い、長野の如きも長いが、長野よりは一層雪が深い、而して縣民は此の積雪深き冬期中を如何にして過ごすであろうか、別に之れ位と思ふ職業もなく、悠悠として炬燵に暖居して居る、抑も此炬燵なるものは決して宜しいものでない、閑だから碌な事をしない、浪費する、酒

を飲む。喧嘩をする、無駄な精力を費やす、實に之に費すのは實に惜しい事である、此に於て冬の利用は實に有要な事である。

蠶業に於ては冬期の仕事は何かと云ふと製絲の季節である、信州等では冬の間盛に行つてをりますが、喊に勇ましい賑やかな晴々した活氣を帶びた者でありますが、實に製絲は冬の間の勞力を利用するに最と上の者である、斯の如く各自に從事する際は酒を飲まず、口論を起さず、喧嘩も起らん者である斯の如きが故に縣下農民諸君は思を此に凝され事を望むのであります。（未完）

秋田山形縣の如きは冬期に織物（絹織物）細工等の色々の仕事をやつて居りますが、之は喊に結構な事であります、それで我が養蠶業に於ては冬期の仕事は何かと云ふと製絲の季節である、信州等では冬の間盛に行つてをりますが喊に勇ましい賑やかな晴々した活氣を帶びた者でありますが、實に製絲は冬の間の勞力を利用するに最と上の者である、斯の如く各自に從事する際は酒を飲まず、口論を起さず、喧嘩も起らん者である斯の如きが故に縣下農民諸君は思を此に凝されん事を望むのであります。（未完）

利用と云ふ事は盛に唱はれてありますが、我國に於ても福島

## 面白き現象

新潟縣中頸城郡五泉町なる北越蠶業講習所教頭小野陽吉氏より編者へ寄こされた書簡中に次の如きことが書いてあつた

蠶業講習所は中ヶ俣長の現場を乗げたる自轉天狗頭の國識技術を有するものは中ヶ俣長の現場を乗げたる自轉天狗頭の國述の多くは失敗の方に割然と現れ外なからしし候且受けられし是にて心當牧育の必要を感ぜりかとひそかに凝御教原り候☆

集芸

# 秋蠶に「あなあき」繭は何故出來るか

通常會員
蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎

俗に「あなあき」繭と稱し繭の一端或は中央の溢れの部分に、蛆が出たよりは遙かに大きい孔があいたところの繭が、秋蠶に於て折り〳〵出來る、そして此の如き繭の出來るのは多くは氣候不順な年に多い樣である、併し何故こんな年に多く出來るかは不明である、種々な事實より推測すると上蔟後の氣候が不良なのに、其所が宜しきを得ない爲め生ずるものの樣であつた、そこで私は是れが出來る原因を探究しやうと思ふ試驗を行ふて見たら、果して豫想に違いなく上蔟後の所置悪しい爲めで、殊に蔟中冷濕である場合に多く生ずるものであることは明かとなつた。

つまり上蔟後氣候が不良で溫度が低かつたり、雨の降つて濕氣の多かつたりして、蠶が繭を營むに適當でないに拘らず



蠶中の保護を怠り適宜に溫度を補ひ、又は濕氣の排除を圖らず、それに又空氣の流通をよくすると云ふ樣なことをせぬかぶもの別合に少なく、薄皮繭であるとか形狀不正な繭であるとか或は疵に多くの「あなのあいた繭」を結ぶのである。

此試驗は去る三十九年と四十一年とに於て行ふたものであるが、之れが成績を見るから詳細がわかるから左に其の概要を記述して示すであらう。

第一回の試驗は明治三十九年の八月に於て行ふたが、其結果は略同一であつたから、其中の一種に就き述べることにする。

飼育方法は白紙であつて七月二十日に掃立て、爾來普通の飼育を爲し、八月九日に老熟したが、之れを上蔟せしむる際に人爲で種々狀態の異なる樣になした場所即ち一高溫になしたる處、二、冷濕なる處、三、開放した處、四、密閉した處及び標準として、五、普通の蠶室の五ヶ所に各五百頭宛を上蔟せしめ、其結果を調べたに、一と三と五の三ヶ所に上蔟せしめたものには上繭を結び、あなあき繭などがなかつたが、二と四即ち冷濕な處と密閉した處に上蔟せしめたものには左表の如く「あなあき」繭が出來た。

| 區別 | 上繭 | 下繭 | 同功繭 | あなあき繭 |
|---|---|---|---|---|
| 高溫區 | 四二一 | 二三 | 二一 | 〇 |
| 冷濕區 | 三四〇 | 一五 | 一〇 | 〇 |
| 開放區 | 三九〇 | 一八 | 二六 | 〇 |
| 密閉區 | 三四〇 | 五七 | 二七 | 〇 |
| 標準區 | 三八九 | 一〇 | 二六 | 〇 |

第二回の試驗は四十一年九月に於て行ふた、供試の蠶は二化性新屋の發生を後れしめ、八月十五日に掃立てた、第二化の蠶兒で爾後普通の飼育をなしたに、九月九日に至り老熟をなしたから、第一試驗と同樣に種々狀態を異にした場所に熟蠶各四百頭宛を上蔟せしめ其成績を調査したるに、第一試驗と少しく異なり、一、三、四、五、の四區には「あなあき」繭は出來なんだが、只二の冷濕區にのみ少しく之れを生じた、即ち左表の如くである。

| 區別 | 上繭 | 下繭 | 同功繭 | あなあき繭 |
|---|---|---|---|---|
| 高溫區 | 二九四 | 三三 | 二四 | 〇 |
| 冷濕區 | 三一一 | 三三 | 一五 | 四 |
| 開放區 | 三一八 | 三〇 | 一一 | 〇 |
| 密閉區 | 二九八 | 二七 | 二〇 | 〇 |
| 標準區 | 三二二 | 二七 | 二〇 | 〇 |

新潟縣東頸城郡農林學校養蠶女生徒桑摘の景

扨上の如く二回の試驗成績は多少の差異あるも、第一回に於ては冷温と密閉の二區に生じ、第二回に於ては冷温區にのみ生じ、その上第二回に於ては第一回に比べて甚だ少なく、斯く異なる成績を挙げた原因には、色々あるであらうけれど、就中温氣の多少が大なる關係を持つ居る樣である、尚詳しく述べると蔟中温氣が多いと「あなあき」繭が出來、温氣が少ないと「あなあき」繭が少なくなる樣である、此關係は蔟中の温度と飼養の日數とを見ると、一目明瞭であるから、右二回の試驗に於て上蔟後四日間毎日七回總測した、平均温度を示すと次の如くである。

第一回試驗

| 區別 | 最高 | 最低 | 平均 | 最高 | 最低 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高温區 | 九二 | 八〇 | 八六、三 | 七五 | 五七 | 六四、六 |
| 冷温區 | 七四 | 七〇 | 七一、六 | 九三 | 九二 | 九二、〇 |
| 開放區 | 八一 | 六六 | 七三、一 | 一〇〇 | 九四 | 五二、七 |
| 密閉區 | 七七 | 六七 | 七三、五 | 一〇〇 | 九四 | 九七、二 |
| 標準區 | 八〇 | 六九 | 七三、五 | 九四 | 七〇 | 七九、一 |

第二回試驗

| 區別 | 最高 | 最低 | 平均 | 最高 | 最低 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高温區 | 九〇 | 八六 | 八六、二 | 九七 | 四一 | 五五、七 |
| 冷温區 | 六八 | 六四 | 六五、四 | 九四 | 八二 | 九二、〇 |
| 開放區 | 七一 | 六一 | 六七、七 | 八五 | 六五 | 七四、一 |
| 密閉區 | 七六 | 七〇 | 七一、六 | 九〇 | 七二 | 七八、六 |
| 標準區 | 七七 | 六七 | 七二、四 | 八二 | 六四 | 七一、四 |

右の二表によりて見れば第二回試驗の密閉區は第一回試驗の密閉區に比して温度は著しく低い、又冷温區も第一回程多温でない、そして温度は第一回に於ては冷温區が多く、第二回に於ては「あなあき」繭が多く出來、蔟中割合に温氣が多くなかつた第二回試驗に於て、之れが少なかつた、つまり温氣の多少と、「あなあき」繭の多少と正比例をなして居ることが確である、だから蔟中温氣の多い或それだけ「あなあき」繭が多く出來るものであると云ふことが想像される。

要するに秋蠶に於て「あなあき」繭の出來るは上來述べた樣に、上蔟後上蔟見の繭を結ぶ間温度が低く温氣が多い際にある樣である、つまり低温多温は之れを生ずる原因を爲す如くである、だから上蔟後雨が多く降り温度が低いと云ふ樣な場合に外から温氣が入ると、温度が低いと云ふて、日障子を切りたりするのは慎むべきことで、それが爲め室内空氣の流通は不良となり、蚕々温氣が多くなり、只に「あなあき」繭を生ずるばかりでなく、それが爲め不正形の繭が多く出來又割合に上繭と思はるゝものでも色澤が悪く、解舒も亦不良である と云ふやうに種々の缺點があるのである、こんなことは敢て秋蠶に限るとは云ふまいけれども、上蔟後の天候に注意し、若し上蔟後不良の天候に遭遇した場合は適當の蔟炎を使用し温度を補ふと共に温氣を排除し併せて空氣の流通を能くすることをはからねばならぬ必ずや「あなあき」繭の出來るのである。





# 何故に原種用蠶種の奬勵をなすか

蚕糸試験場 鳥羽久吾

現行蠶病豫防法中蠶種を二大區別してある原種用蠶種、製絲用蠶種、かく區別する必要は何れに關係したであらうか、其文字は明かに之を說明してある、原種用は蠶種製造家の其原種に使用するもので、製絲用は一般養蠶家が絲繭に供用する蠶種である、然るに現今蠶種に於ては、原種用は供用されて居り、之は養蠶家自身の考へよりいでた蠶種の購入でなくて、縣郡當局扶助の奬勵や蠶業教師の勸誘のため、原種用は普通養蠶家に完全なるものとして、漫然原種用蠶種を購入何育するものである、現に縣の蠶業組合には若干の奬勵助金を與へて居るに係らず、普通製蠶種の共同購入には補助金を與ふるよりは撿査を與へて居る、等しく豫防法の規程に於て完全なりとして撰擇せし蠶種に、何故かく差の相異ある方針により良否を定むるであらうか、予輩が實に解すべからざる所である。

## 原種用蠶種は必らず精良なるか

原種用蠶種と製絲用蠶種との異なる所は極めて僅かである、蠶見の撰擇個人差も蠶繭蠶蛾も蠶病豫防法の上に何等の區別がない、只其の母蛾を鏡檢して微粒子の有無を定め、病毒ある種卵を削除するのである、微粒子なき種卵のみ生じ、而して病毒なる蠶見は直ちに廢棄し、若し上蔟後不良の天候に遭遇した場合は適當の蔟炎を使用し温度を補ふと共に温氣を排除し併せて空氣の流通を能くすることをはからねばならぬ必ずや「あなあき」繭の出來るのである。





微粒子なき蠶見は直ちに廢棄し、若し上蔟後不良の天候に遭遇した場合は適當の蔟炎を使用し温度を補ふと共に温氣を排除し併せて空氣の流通を能くすることをはからねばならぬ必ずや「あなあき」繭の出來るのである。

普通製蠶種にも健良のものがあるから強ち其多少は知ることが出來ぬ、微粒子の有無を鏡檢することは出來ぬ、而し製絲用種にては微粒子の有無を鏡檢することは出來ぬ、微粒子の多き蠶種は不良なるものである、原種用蠶種は普通製蠶種の鏡檢は母蛾のみにて蠶見に及ばねば、然るに母蛾檢査には無毒の檢査印あるに係らず其蠶卵に病毒の有無の檢査を與へず、蠶見の撰擇は不正なる蠶種家が法規を逃し、蠶種の缺點を見出すことに思はれる、これ、撰立蛾の鏡檢は、何人なりとも肉眼にて蠶見に對し云ふ如く、蠶見の撰擇個人差も蠶繭蠶蛾も蠶病豫防法の上に何等の區別がない、只其の母蛾を鏡檢して微粒子の有無を定め、病毒ある種卵を削除するのである、微粒子なき種卵のみ生じ、而して病毒なる蠶見は直ちに廢棄し、若し上蔟後不良の天候に遭遇した場合は適當の蔟炎を使用し温度を補ふと共に温氣を排除し併せて空氣の流通を能くすることをはからねばならぬ必ずや「あなあき」繭の出來るのである。

普通製蠶種にも健良のものがあるから強ち其多少は知ることが出來ぬ、微粒子の有無を鏡檢することは出來ぬ、而し製絲用種にては微粒子の有無を鏡檢することは出來ぬ、微粒子の多き蠶種は不良なるものである、原種用蠶種は普通製蠶種の鏡檢は母蛾のみにて蠶見に及ばねば、然るに母蛾檢査には無毒の檢査印あるに係らず其蠶卵に病毒の有無の檢査を與へず、蠶見の撰擇は不正なる蠶種家が法規を逃し、蠶種の缺點を見出すことに思はれる、これ、撰立蛾の鏡檢は、何人なりとも肉眼にて蠶見に對し云ふ如く、蠶見の撰擇個人差も蠶繭蠶蛾も蠶病豫防法の上に何等の區別がない、只其の母蛾を鏡檢して微粒子の有無を定め、病毒ある種卵を削除するのである、微粒子なき種卵のみ生じ、而して病毒なる蠶見は直ちに廢棄し、若し上蔟後不良の天候に遭遇した場合は適當の蔟炎を使用し温度を補ふと共に温氣を排除し併せて空氣の流通を能くすることをはからねばならぬ必ずや「あなあき」繭の出來るのである。

ある、少くとも製種用種に病毒検査を以て病毒何分以上は廃棄とする傾向が顕はれて来た。

蓋し養蚕家に原種用蚕種を供給する養蚕家は、悪玉に現今蚕部等の技師が検査を厳重に為すべき筈なるが、其検査が緩漫なるが為之を危険として努めて原種用の安全を唱へ、其指立てること迄に至る。

養蚕家は、其一種の病毒の有無を保證する為め、原種用蚕種を普通製種と同一種の取扱を為すこと、萬一其普通製種が混付原種と異なるあらば其取扱又は代金の返戻を要求することである、経験ある蚕種家の自身が其蚕種を飼育し、其蚕見を飼育し発育状況に見て異なりたる時は、之は健全なるものと認めしものは、親蛾の産卵調査に優る確定が確実である、殊に其蚕種の中に病毒無であつたならば夫より精良のものはない、之こそ見に企業健全なるものである、然るに蚕種を販賣するに不正なる者たり母蛾を入替たる手段により幼稚の私の印を捺する等悪疎なる蚕種の養蚕者を欺くものがあるから、更に普通製蚕種の蚕種の成績と相異なるものは代金の返戻又は取替をする為めに、蚕種家が今責任をもつて蚕種の精良を保證する以上は、ことに更ら高価の原種用種を蚕商飼育に供用する必要なからうと思ふ、然るに養蚕家未開地には原種用蚕種の其が低価なるものがある原種用一枚の価ひ十五銭乃至三十銭位にして無毒の證印あるものは、共通的のものではない、蚕種家が養蚕家より申込金員を集むるものに非ずして、蚕種家の献身的所信によつて自家原蚕種の育成し、其原種用蚕種を強健なる蚕種と同一種と為し、其蚕種の無毒なるを保證する為め、原種用蚕種を普通製蚕種と同時のものを混付すること、萬一其普通製種が混付原種と異なるあらば其取扱又は代金の返戻を要求することである、経験ある蚕種家の自身が其蚕見を飼育し、発育状況に見て異なりたる時は、之は健全なるものと認めしものは、親蛾の産卵調査に優る確定が確実である、殊に其蚕種の中に病毒無であつたならば夫より精良のものはない、之こそ見に企業健全なるものである、然るに蚕種を販賣するに不正なる者たり母蛾を入替たる手段により幼稚の私の印を捺する等悪疎なる蚕種の養蚕者を欺くものがあるから、更に普通製蚕種の蚕種の成績と相異なるものは代金の返戻又は取替をする為めに、蚕種家が今責任をもつて蚕種の精良を保證する以上は、ことに更ら高価の原種用種を蚕商飼育に供用する必要なからうと思ふ、然るに養蚕未開地には原種用蚕種の其が低価なるものがある原種用一枚の価ひ十五銭乃至三十銭位にして

塙長光氏　北海道蚕種製造所　蚕種製造業　蚕育調査所の所員

## 蠶種の保險は如何になすか

蠶種に保險を附すると言ふて彼の生命保險や火災保險の如く申込人より加入金を集め、其貯金に因て得る利益を不幸の知



費込み、而も費用するものがある、原種用として選擇したる産卵は、其生産費より言ふも一蛾一錢以内には出来ぬ、之に産卵検査等の諸費を加入して斯く安價に出来べき筈のなき原種が流布されて居る、原種用蚕種の蛾蛾も森に至つて極めて危険なるものではあるまいか、斯る地方の養蚕家が毎年失敗に失敗を重ぬるも之を救済する方法なきとは現下蚕業界の一大缺陥である。

## 全國の製種検査費一百萬圓

子蛾同様になる蚕業毎月会は、前議会に蚕病豫防費の全部を國庫支弁とする為め豫防法第十八條の改正を請願し、衆川代議士外四十餘名の賛助により、直に法律改正案として衆議院を通過し、貴族院に於て不幸挫折つぶしとなつた、其際の調査によると各府縣の蚕種検査の為め要する諸費は一百萬圓に達して居る、而のみなら子安より原種用種を奨勧するため、年々其生産を増加し此蛾を買て推さば全國百萬枚に近き掃立の蚕種は原種用となり、地方の財力は之が検査に要して技術者其他の設備も殆んど不可能になりはせぬか、杞憂なかる比較的効果少なき斯る奨勧は他の方法に投ぜられんことを頗るの可なり、而しながら現行の蚕病豫防法の下にては其生産せられたる蚕種は蚕く精良なりとは云ぬは勿論であるから幼稚なる養蚕家を指導して精良なる蚕種を撰擇供用を教へ、其不備の點、缺陥を補正して原種用種蚕種用種の別なく調査家のため蚕業経済の安固を計るは緊部當局者の努めてはあるまいか。



# 柞蠶は如何なる習性を有するか（承前）

遠州蚕育員
勤業機織指導手　長岡哲三

## 温度と産卵との關係

一、柞蠶蛾の産卵は温度の高低に依り多寡があるであらうかどうであらう、又其産卵は數日に亘るものやうであるが、果して何日間に亘るものであらう、而して温度の高低に依りて其産卵日數に長短あるであらうかどうであらう、予は製種上の參考に資したいと思つて是等の事實を調査した。

一、即ち春蚕に於て

甲区　加温せざる室内にて産卵せしむ
乙区　加温せざる室内にて産卵せしむ
丙区　加温せざる室内にて産卵せしむ
丁区　加温せざる室内にて産卵せしむ

蛾の四区に別ちて各十蛾づつ三月廿日産卵調査したのである。

一、調査の結果を見るに各區の産卵は共に七日の長さに亘り其産卵歩合及平均数を記すれば左表の如くである。

産卵数調査表

| 区別 | 平均 | 第一日 | 第二日 | 第三日 | 第四日 | 第五日 | 第六日 | 第七日 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 甲区 | 産卵数 | 八三五 | 八四〇 | 八五六 | 七五一 | 七四三 | 八五〇 | 六八六 |
| | 遺卵数 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| | 産卵歩合 | 九九・九 | 九〇・〇 | 九二・五 | 九六・六 | 九三・三 | 九〇・〇 | 八六・六 |
| 乙区 | 産卵数 | 八七九 | 八四〇 | 八二五 | 七五〇 | 七五三 | 七五一 | 七三三 |
| | 遺卵数 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| | 産卵歩合 | 九七・九 | 九〇・〇 | 九一・六 | 九〇・〇 | 九一・八 | 九一・五 | 九三・三 |
| 丙区 | 産卵数 | 八四五 | 八五五 | 八四一 | 七五三 | 七五五 | 七五一 | 七五一 |
| | 遺卵数 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| | 産卵歩合 | 九〇・〇 | 九一・〇 | 九一・六 | 九〇・六 | 九〇・〇 | 九〇・〇 | 七九・一 |
| 丁区 | 産卵数 | 八二八 | 八二〇 | 八一六 | 七五三 | 七五五 | 七五〇 | 七九一 |
| | 遺卵数 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 |
| | 産卵歩合 | 八二・八 | 八二・〇 | 八一・六 | 七五・三 | 七五・五 | 七五・〇 | 七九・一 |

甲区　各日の産卵数の最も多いことは各区とも一致し、第二日目以後にあっては時として例外がないでもないが、概ね逓減して居る、而して其逓減率は温度の高いものより低きに従つて少かつた、又母蛾の所蔵卵数の産卵歩合は温度の高き丙及甲区に於て最も多く、乙之に次ぎ、温度最も低き丁区最も少ないのを見た。

一、又各区各日に於て産卵せる卵量を調査せるに左表の如き数を得た。

卵量調査表（對百粒）

一、前項の調査に依りて雌蛾の産卵は七日の長きに亘るが三日目以後のものは其卵数が極めて寡少であつて之を敢て薬するも殆んど孵化しない事を知つた、予は更に各日に於ける産卵と母蛾の産卵との関係を調査して、何れの日の産卵が最も強健にして飼養に適するやを確め、卵種取捨の便に供せんとせり。

即ち春蚕に於て第一日目より第六日目に至る各日の産卵

## 産卵の早晩と蠶兒發育との關係

一、前項の調査中第一日目以後のものは、各区共に産卵数極めて少なく、僅かに数粒を産出するに過ぎざるものであるから、必ずしも正部とは得なかつたけれども、第三日目以後のものは大体に於て第一日目より量を示したのである。

一、其産卵後孵化に至る日数に於ては普通順を追つて孵化し、其晩き産卵は大体に於て孵化日数を延長し、其最も晩きものゝ如きは、一次に孵化したのである。

一、蠶蛾は七十度内外の温度を興へて産卵せしむるときは、一天然温度六十度内外の場合に於て産卵数を多からしむるばかりでなく、孵化を齊一ならしむることが出来る。

又記如く七の長きに亘りて産卵するものであるけれども、第三日目以後のものは寧ろ之を淘汰するが得策である、況して卵数極めて寡なきものは蟻蚕のことである。



百粒を採りて其試驗に供した、但し第一日第二日目の産卵は一蛾乃至二蛾の産卵であるけれども三日目以後のものは一二蛾の産卵を以て目的の蛾蠶を得ることが出来なかつたから蛾の産卵を供用した。

一、今其孵化の狀況を見るに第五日、第六日目産卵の同日發生せる例外を除き、他は産卵の早晩に依りて發生も遲速の区別して第一日目第二日目のものは全殆んど一日間に孵化したけれども、三日目以後のものは順次孵化不齊となり、且つ不發生卵が多く、加ふるに卵殻の一部を破り孵化半にして死せるもの、又は孵化せる蛾蠶も甚だ尾弱にして、繭中に逐巡し食慾なきもの等を認めた、今其狀況を表示すれば左の如くである。

孵化狀況調査表

| 区別 | 産卵数 | 第一日 | 第二日 | 第三日 | 第四日 | 第五日 | 第六日 | 合計 | 不發生卵数 | 孵化歩合（百分率） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一 | 八三五 | 一〇〇 | 九八 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |
| 第二 | 八四〇 | 一〇〇 | 九七 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |
| 第三 | 八五六 | 九八 | 六八 | 四二 | 二一 | 三三 | 二七 | 二七 | 一 | 九九・八 |
| 第四 | 七五一 | 一〇〇 | 一五 | 一一 | 一一 | 一〇 | 一〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |
| 第五 | 七四三 | 一〇〇 | 一一 | 一一 | 一一 | 一〇 | 一〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |
| 第六 | 八五〇 | 一〇〇 | 一一 | 一一 | 一一 | 一〇 | 一〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |
| 第七 | 六八六 | 一〇〇 | 一一 | 一一 | 一一 | 一〇 | 一〇 | 一〇〇 | 〇 | 一〇〇・〇 |

一、蠶兒の發育經過は第二第三最も齊一佳良であつて、其数も短かく、又活潑でなく、經過日数も甚だ長かつた、又各区蠶兒の體量を調査せるに左表の如くである。

蠶兒體量表

| 区別 | 第一日 | 第二日 | 第三日 | 第四日 | 第五日 | 第六日 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一 | 〇・〇一八 | 〇・〇一五 | 〇・〇二四 | 一・五〇〇 | 四・七〇〇 | 〇・〇〇〇 |
| 第二 | 〇・〇一八 | 〇・〇一八 | 〇・〇二六 | 一・八〇〇 | 五・一〇〇 | 〇・〇〇〇 |
| 第三 | 〇・〇一八 | 〇・〇二八 | 〇・〇三四 | 一・〇五〇 | 四・六〇〇 | 〇・〇〇〇 |
| 第四 | 〇・〇一八 | 〇・〇二七 | 〇・〇三〇 | 一・〇〇〇 | 四・五〇〇 | 〇・〇〇〇 |
| 第五 | 〇・〇一八 | 〇・〇二六 | 〇・〇二八 | 一・〇〇〇 | 四・五〇〇 | 〇・〇〇〇 |
| 第六 | 〇・〇一一 | 〇・〇二五 | 〇・〇二五 | 〇・九〇〇 | 四・三〇〇 | 〇・〇〇〇 |

一、前表に示したやうに、第二は終始を一貫して最も重く、第一之に次ぎ、第三以下順次之に次ぐ、殊に第四以下は甚だ輕かつた、更に又各区の上繭に付其品質を調査せるに左表の如くである。

繭調査表

| 区別 | 繭長 | 繭幅 | 繭量 | 繭層量 | 繭量 | 蛻皮量 | 繭層歩合 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第一 | 一・四八 | 〇・七五 | 一・九〇〇 | 〇・一四九 | 一・七三一 | 〇・〇一九 | 七・一 |
| 第二 | 一・五一 | 〇・七九 | 一・九六〇 | 〇・一五八 | 一・七八三 | 〇・〇一九 | 八・一 |
| 第三 | 一・四九 | 〇・七四 | 一・九二〇 | 〇・一四九 | 一・七五三 | 〇・〇一八 | 七・八 |
| 第四 | 一・四七 | 〇・七四 | 一・八五〇 | 〇・一四二 | 一・六九〇 | 〇・〇一八 | 七・七 |
| 第五 | 一・四〇 | 〇・七二 | 一・八七〇 | 〇・一三〇 | 一・五二四 | 〇・〇一八 | 七・八 |
| 第六 | 一・四〇 | 〇・七二 | 一・八六〇 | 〇・一三〇 | 一・五一四 | 〇・〇一六 | 七・八 |

一、即ち繭に就て見るも第二目産卵のもの最も佳良であつて、第一之に次ぎ、第三第四以下漸次劣れるを見るであらう。

一、之を要するに凡てに於て第二日目產卵のもの最も優位を占め、第一之に次ぎ、第三日目以後の產卵は順次甚だ劣れるを見るべしであらう。

一、而して此調査に於ては柞蠶飼養上最大關係を有する飼料に就ては、素より絕對的均一を期することが出來ないけれども可及的平等を圖り、其受けたる氣象狀況亦大同小異なるに係らず以上の結果を表した。

一、之を以て見れば柞蠶の卵は第一日目のものより第二日目の方勝れるものか未だ一回の調査を以て斷定することが出來ないが、三日目以後の產卵を飼養に供することの絕對に不得策なることは斷言して憚らざる處である、況んや其產卵數其孵化率に於ては、之を放棄するは經濟上殆んど影響を蒙ることなきに於てをやである。（未完）

# 蠶種界に行はるゝ不正の實例

在松本市　不正蠶種撲滅期成同盟會

第一　何が故に不正は行はるゝ乎

農作上に於ける種子の撰擇は最も必要の事であつて、若し惡き種子を播くと、來作なり、豫作なり、其他何等の作物にても到底十分の收穫が見る事が出來ない。

蠶種に於ても亦た同樣であつて、蠶種の種子たる繭の取れ方如何で、若し當に繭の取れ方が不良なれば、其蠶種の孵化率は甚だ不良であつて、其蠶種を生じて其の影響が次回の蠶種に及ぼす事は明白の道理である。

然るに、此の理を知らずして、蠶種の種子たる繭の取れ方が不良であつても、其蠶種の孵化率が良ければ、其蠶種は良蠶種であると誤解して、不正蠶種を使用する者が多いのである。

蠶種の孵化率が良ければ、其蠶種は良蠶種であると誤解して、不正蠶種を使用する者が多いのは、其

ても、出來るのは南方であつて北部の方は夏に出來ない、其出來ないのにはイロ〳〵の關係もあらうが、北方は一體に大農組織であるから、手の先きのみで遊る養蠶などは到底遣つても割に合はないからです、併し南部の方で

ふに少しも骨が折れない、日本ではヤレ天窓ヤレ備附と空氣の事を喧しく謂つて居ますが、佛蘭西では例の西洋造の室をピシヤリと締切つて空氣などは丸で無頓着に飼育して居ます、尤も火でも用ゐたときには幾分か空氣の交換も行はれやうが、其他の場合には新鮮の空氣などは決して這入つて來ない夫れでも格別病蟲が出ないから空氣の乾燥して居ると居らんとでは大變な違ひであります。

一體佛蘭西の人は空氣と水とを大層儉約するのでありまして、蟲室などに換氣を行はないといふのも空氣を儉約する一例と見て宜しいのですが、之は一寸習慣から來て居るのでありませうが、水は大抵ふ沢でありますから、金が更に掛らんでもないが、夫れにした處で甚しく儉約するのは吾々日本人の眼から見て奇妙に感ずる位であります、十人位の御客をした食器類の如きは、手桶に一杯も水があれば夫れで全部を洗つて仕舞ふのです、故に最後に洗ふ時分には油でゴテゴテするやうになるのですが、夫れでも構はずに洗つて居る、斯ういふと如何にも不潔のやうですが、向ふでは洗ふといふよりも寧ろ拭き取るといふ方でありますから、其洗つた後を力をこめてスツカリと拭き取つて、綺麗にするのであります。

## 佛蘭西國民と貯蓄

佛蘭西の國民は淺しいほど金を澤山持つて居ります、露西亞が日本と戰爭することの出來たのも、佛蘭西が金を貸して呉れたからであります、して、米國經濟界の大恐慌を救濟したのも佛蘭西であるといふ譯けです、尤も米國へ金貸を送つたのは英蘭銀行で、之れが爲めに同銀行は金貸の準備に缺乏を告げ大騒ぎとなつたのであります、佛蘭西から借りて來たのに、なぜ佛蘭西へ送つたのかと云ふ疑念を誘はれたのであります、佛蘭西人は一ウエーで這んな に澤山金を持つて居るかといへば勤儉貯蓄といふよりは寧ろ儉といふ方で貯蓄して置くからであります、彼國民は御一遍人みた樣に決して勤勉の國民ではなく、倹しく節儉といふ事は恐らく世界第一位等であらせう、同定貸を投ずるには少しも惜しまないが、家の屋の樣なものでも、永々使ふ物に對しては惜しみます金を掛けて良いものを作つて置くといふ風で、飲食物のやうな一時に消費して仕舞ふ物に對しては甚だケチ、御客をしても無駄の品物は決して作らんやうにしてタトへ幾つた品物でも夫れから夫れへと巧に利用しなければならぬやうなことは決してしないのであります、で彼等は常に貯蓄といふ考を捨てないのであります、して現在のことにみ心を取れて居ると云つても良い位であります、此良習慣はイツ頃から養はれたものか判らぬが恐らくルイ第十四世やルイ第十一世の時分から養成せられ、更に普佛戰爭の苦き經驗に依つて養はれたものであらせう、何んでも今は金の世中であります、我日本人も少しは佛蘭西人の真似をして貯蓄するやうにしたいものであります。

歐米に於ける日本人の評判は餘して良くない、夫れは畢竟日本人がかゝる事をするからです、見たいものは見たい、慾しいものは慾しいと明らさまにいへばよいのに、夫れを決していはなくて、こつそりと盜んで來る奴などがあるので、スツカリ日本人の信用を墜して獨逸の工場などは大抵日本人に出來ないやうにして仕舞ひ出した、所謂島人根性の結果がこゝに至つたのかも知らないが、元はといへば金が無いからです、金さへあればドンな秘密の物でも見るとも出來、亦買ふことも出來ますけれども、金がないからツ慾しくても買へない、買へない結果が遂ひむといふやうな淺間敷根性を起すやうになるのであります、ニ向ふの秘密を買へば太いしたものです、併し今日となりては安くは買ひますまいが、ナンボ丈け需要の多いものを一ヶ輸入に仰ぐといふことも甚だ惜しいも……ナニ向ふの品物でも賣ります、ですから金にさへなればドンな秘密の品物でも賣ります、ですから日本に金さへあればドンジン外國の發明品でも買ふことが出來るのであります、だが悲しいことには金がない、近來外資輸入などといつて騒いで居ますが安くて七分か八分の利息でなければ借りることが出來ないから矢張借りて間に合はないことになるのであります、何んでも自分の國に金を澤山貯蓄して他から借りずに寧ろ借して遣る位にしたいものであります。



# 中米及南米視察談

法學士　岡　實

本篇は中米及南米を視察して歸朝せられた岡學士の談話である我經濟家の爲に頗る參考になるべしと信じ特に讀者に紹介する所以である

## 旅行の順序

旅行の順序ですか始に北米合衆國、次に「メキシコ」「パナマ」共和國、從來皆利それからずつと南米の南端「マゼラン」海峽を通ると、亞爾然丁に這入り、ウイルグワイ國に寄り、最後に「ブラジル」へ出て太西洋を渡り、南米の舊母國たる西班牙、瀛嶋牙より北米に入り西北利亞を通つて歸朝いたしました、其路程凡そ四萬哩、日を費すこと三百日の旅行でございます。

## 旅行の目的

旅行の主たる目的は從來多く日本に知れざりし是等南米の各國の現狀如何、將來日本と通商移民上何ら云ふ關係を有すべきものであるかと云ふことを調べるのでございました、それで只今私は南米諸國の現勢の大體を申しげ、終に日本人の將來、海外に發展するに就き施設の方針としては何ら云ふことをなすべきであるかと云ふことに關して、管見を申し上げ度いと考へます。

# 北米合衆國

先づ北米合衆國の狀況をかい摘んで申しますと、此の國は御承知の通り各種の人種から成立つて居つて、殆ど歐洲各國の文物を此所に集中し、世界文物の中心たらんとする勢がある樣に見えます。例へば工藝品の上から申しても、歐洲各國には夫々長所があつて、各々其長所を守つて居るが、北米には國有の長所がないから、各々國の長所を創設せんとして居る、歐洲各國には最近に於て左まで大なる國家意匠上の變化がないが、北米は前に參りました時に比して二年間に一大變化を呈して居るに過ぎない、北米人は何事に於てもあれ新らしいのでなければ氣に入らぬ、善くとも惡しくとも新を好む、彼等は何事に付けても世界一たらんとするの野心を持つて居る。

In the world とは彼等の口癖である、北米の進歩は實に驚く可きであるが、斯くの如き進歩を北米がすると云ふことは各人が非常な勤勉精勵を以て其の業に精を出すことから起つて來る、素より廣大無限の天然の富源が各人の希望と野心を刺戟して一刻も怠慢に日を送ることを許さない樣にさせるとも云ふこともありますが、一方に於ては在來の人民及年々入國する歐洲移民が非常なる勉勵で、殆ど一人で三人以上の仕事をやると云ふ程勤勉にして國土の開發文運の發展を促進して居るからである、北米人位氣の落ち付かない人民である、一方に於ては精神上の開發も亦大に見る可きものがあつて學問上の開發も今て歐洲に遜色なきまで進歩して居る、國民教育及高等教育の進歩を撮きて大學校及圖書館を建設し、國民教育の有樣は世界中北米國の文物を此所に集中し、世界文物の中心たらんとする所であつて、此種の美擧は世界中北米に於て最も多き樣に思はれます。

北米に於ては

を設て、明治二十九年から生徒を養成し蠶業教育普及の一助としてあつたが、不幸にして三十一年に至り之を中止せらるゝ事になり、蠶業教育の機關は全く茲に無くなつたのである。此缺如を補ふ目的を以て我組合は明治三十五年に此蠶業講習所を設置したのであります、本科及び學科の二つに區別して最初は蠶業上の學理及實習を教授し、つゝあるのであります。

修業期間は五ヶ月間とし毎年二回に分ち次に規模を擴張して本科の講習期を六ヶ月間とし別に學科を設けて男女人を募集して本科に學科を許し學科に於て蠶業生として連んで學理及實習の研究を爲さんと希望する者の爲に研究科を設置しました。

加設しました。

殺しました。

巡回指導

殺しして種々の試驗も行つて居りますが、最近の要路に立ち若くは實業界に於て活躍して居る人士の多くは我組合の卒業生であります。

隣の當業者に示しつゝあるのであります。

巡回指導は蠶業上の學理及實習を教授しつゝあるのであります。

であるかもせうが、我組合は之が一番宜しかろうといふのです、即ち蠶業上の學理及實習を教授しつゝあるのであります。

ろうといふのです、我組合は之が施設に就て考慮して居りますが、明治三十年は生徒養成に當時取締役として居たのであります、二十一年には當時取締役として居州から職工三名を雇入れ二十二年には當時取締役として居ました、私が奉職して居る頃は何部由次郎氏を招聘して巡回教師の任に當つて居ました、爾來教師養成して一日中絕の委となりましたが、三十四年に至り再び巡回指導の途を開き、常設及臨時の技藝を教授し引續き今日に至る迄都合四十六年の間に於て毎年引續き北越蠶業講習所卒業生の組織に掛る北越蠶業友會が主催となつて品評會を開きました、尚四十年より各郡落に實地生產品品評會を開き、上蔟蠶沿各一枚宛を出品させて、之れを調査し、以て地方蠶業の發展に資するに致しました。

いやが上にも奮勵し、以上は組合内に於ける仕事でありますが、此處外に向ては博覽會、共進會等に對し、毎回之が出品を多數の夢を取り遊川乾繭保管等に便宜を與へ、即ち本縣に開設に至る迄出來得る丈けの盡力をして來ました。

かれました一府十一縣聯合共進會五回、內國勸業博覽會山梨縣主催一府九縣聯合共進會長野縣主催一府十縣聯合共進會等の組合員からの出品は悉く之を統一して遺憾なく世話して居ります。

以上の外消毒藥品桑苗等の共同購入、蠶種の配布風穴の調査印刷物の配布模範桑園の設置桑園の評議會等種々の施設をして居りますが茲に特に御話し申上げたいのは

品評會並共進會

我組合で始めて品評會を開設したのは明治二十一年五月であります、當時の出品は繭六十五點蠶絲二十二點、生糸八十四點參考品七十點餘點といふ極めて少數でありましたが、二十三年中止し、二十六年に再び之を開設し、二十七年迄毎年引續き北越蠶業講習所卒業生の組織に掛る北越蠶業友會が主催となつて品評會を開きました、尚四十年より各郡落に實地生產品品評會を開き、上蔟蠶沿各一枚宛を出品させて、之れを調査し、以て地方蠶業の發展に資するに致しました。

常設及臨時の技藝を教授し引續き今日に至る迄都合四十六年の間に於て毎年引續き北越蠶業講習所卒業生の組織に掛る北越蠶業友會が主催となつて品評會を開きました、尚四十年より各郡落に實地生產品品評會を開き、上蔟蠶沿各一枚宛を出品させて、之れを調査し、以て地方蠶業の發展に資するに致しました。

いやが上にも奮勵し、以上は組合内に於ける仕事でありますが、此處外に向ては博覽會、共進會等に對し、毎回之が出品を多數の夢を取り遊川乾繭保管等に便宜を與へ、即ち本縣に開設に至る迄出來得る丈けの盡力をして來ました。

かれました一府十一縣聯合共進會五回、內國勸業博覽會山梨縣主催一府九縣聯合共進會長野縣主催一府十縣聯合共進會等の組合員からの出品は悉く之を統一して遺憾なく世話して居ります。

以上の外消毒藥品桑苗等の共同購入、蠶種の配布風穴の調査印刷物の配布模範桑園の設置桑園の評議會等種々の施設をして居りますが茲に特に御話し申上げたいのは

雪圍貯藏

の事であります、之は我組合が京都蠶業講習所の覺木技師の依賴を受けて現在小野敬男の周密なる考案に基き、何時でやの貯藏に於て見るに至りました、此貯藏所は長岡市中に蠶種を貯藏されたる處であります。

雪圍貯藏所の構造は蠶種を貯藏する所の周圍に雪を詰め込み其上に蠶種を置き其上に雪を詰め込むのであります

すから、不肖の一私も其重任に當りて、格別の誤りもなく、今日まで經過して參りました事であります、之は諸氏に對して平素深く感謝して居る處であります、獨り組合のみとはいはず、社會凡ての事業は其人物を得るといふことが大切でありまして、人物を得た上は其同一致といふ事が極めて大切であると思ひます、マダイロ〳〵、御話もありますけれども御疲れでせうから、ドーモ御休み下さい、また明日の晩にでも緩くりお話致しませう。（完）

## 鹿兒島縣の蠶絲業は如何にして發達したるか

鹿兒島縣生糸同業組合長　上田義高

本稿は上田氏が上京の際本會事務所に於て編者に語りたる談話の概略なり文責編者

鹿兒島縣の蠶絲業ですか、後進地の鹿兒島別に御話するほどの事もありませぬ、併し折角の御尋ねに何も御話せんのも却て失禮と思ひますから胸に浮かんだまゝを取り出してポツ〳〵御話致しませう……といつた處で一寸困りなさるな……ハ、我が國の蠶絲業は後進地の鹿兒島に於て如何なる人さへも實に悲かつたのであります、ですから、海外へ輸出せらるゝ生絲などは少しもなかつた只僅に博多や大阪の西陣へ出して居つた一人であります、私共なども其博多や西陣へ出して居つた一人であります、其數量などは實に御恥しい位に少かつたのです、ソコへ製絲合同販賣組合をボツンと組織したのでありますから。

### 他府縣の組合

とは全く其成立が違ふのです、他府縣のは御承知の如く、蠶絲業家が昔の如くある處へ、夫れを纏めやうとして組合を組織したのでありますから、組合員の絲一といふことに就て隨分骨も折れるやうに聞いて居ります、けれども、私共の組合は加入せしむべき當業者のない處へ、其先に組合が出來て居て後から當業者が出來たのですから、先輩は即ち組合であつて同事業者は換言を組合に取るといつたやうな風に新たに製絲業に從事する者は組合に加入するものと心得又組合員としては組合以外に立つて仕事をしやうといふ野心を有する者もなし、獨立して旗揚げしやうと謀叛を企つる者もありませんで、自分で拵へた生絲はズン〳〵組合へ抵當に供して之に依託し、其成績が如何樣に苦情等無く販賣いことをいふて出る者もないから、極めて圓滑に合同販賣を依託して居ります、之は他府縣に多く、其例を見ることの出來ない事であらうと思ひますが、ドーして生絲販賣の上に斯く金なるものを利用して捨てたのであります、其當時器械生絲なと買ひ集める者は一人もなく、悉く繭買絲を行る人さへも實に悲かつたのであります、ですから、海外へ輸出せらるゝ生絲などは少しもなかつた只僅に博多や大阪の西陣へ出して居つた一人であります、私共なども其博多や西陣へ出して居つた一人であります、其數量などは實に御恥しい位に少かつたのです、ソコへ製絲合同販賣組合をボツンと組織したのでありますから。

### 鹿兒島縣蠶絲業の沿革

蠶絲業家が星の如くある處へ、夫れを纏めやうとして組合を組織したのでありますから、組合員の絲一といふことに就て隨分骨も折れるやうに聞いて居ります、けれども、私共の組合は加入せしむべき當業者のない處へ、其先に組合が出來て居て後から當業者が出來たのですから、先輩は即ち組合であつて同事業者は換言を組合に取るといつたやうな風に新たに製絲業に從事する者は組合に加入するものと心得又組合員としては組合以外に立つて仕事をしやうといふ野心を有する者もなし、獨立して旗揚げしやうと謀叛を企つる者もありませんで、自分で拵へた生絲はズン〳〵組合へ抵當に供して之に依託し、其成績が如何樣に苦情等無く販賣いことをいふて出る者もないから、極めて圓滑に合同販賣を依託して居ります、之は他府縣に多く、其例を見ることの出來ない事であらうと思ひますが、ドーして生絲販賣の上に斯ういふ良い風習がついたかといふと、古くから斯業を經營して居る人は兎角天狗になり易いが我鹿兒島は後進地で有る丈け夫れ丈け、自分の事許り言ふやうな木業天狗は居らないことと思ひます、鹿兒島縣人は交通不便の關係もあるからが、昔から隣接地方に富んで居るといふことが一つ、製絲業同販賣組合に於ける檢査其他の取扱が凡て嚴格であつて了度のないといふ事が一つ、之等の關係が自然に集つて此美風を產み出したのであります、尙我縣には

### 鹿兒島縣製絲同業組合

といふのがあります、之は明治四十年五月の設立でありますけれども、併し其淵源する處は去明治十八年に組織せられたる蠶業組合に在るのであります、之は御承知の彼の蠶業組合準則に據つたものでありまして、全縣を以て一大組合とし、地理上の關係から縣下を三十八區に別ちて各區に一つの小組合を設き、其後更に四十七組合に小分しましたけれども、同事業者は換言を組合に取るといつたやうな風に新たに製絲業に從事する者は組合に加入するものと心得又組合員としては組合以外に立つて仕事をしやうといふ野心を有する者もなし、獨立して旗揚げしやうと謀叛を企つる者もありませんで、自分で拵へた生絲はズン〳〵組合へ抵當に供して之に依託し、其成績が如何樣に苦情等無く販賣いことをいふて出る者もないから、極めて圓滑に合同販賣を依託して居ります、之は他府縣に多く、其例を見ることの出來ない事であらうと思ひますが、ドーして生絲販賣の上に斯ういふ良い風習がついたかといふと、古くから斯業を經營して居る人は兎角天狗になり易いが我鹿兒島は後進地で有る丈け夫れ丈け、自分の事許り言ふやうな木業天狗は居らないことと思ひます、鹿兒島縣人は交通不便の關係もあるからが、昔から隣接地方に富んで居るといふことが一つ、製絲業同販賣組合に於ける檢査其他の取扱が凡て嚴格であつて了度のないといふ事が一つ、之等の關係が自然に集つて此美風を產み出したのであります、尙我縣には

二つの組合が其目的及其任務に於て更に衝突することなく二者相待つて甘く働いて居ります……ハ、其

## 生絲の檢査

てありますか生絲同業組合でも枝節技手を設いて當業者の生産品を檢査して居りますが、併し之は前きに述べました やうに、除害防除の方でありますから當業者の不正行爲を防き粗製濫造を取締るといふ程度の下に遣つて居るに過ぎないから品位檢査は製絲共同組合の方で遣つて居ります、乃ち之が機關として組合は生絲檢査所を設けて機度、類節、色澤切斷等の檢査を嚴重に施し製品の統一を圖つて居ります が一體明治十七年に生絲合同販賣所を設けた頃にはヤダ海外へ輸出せらるゝ生絲いとふのはなかつたのです其後輸出の道の開くると共に段々荷造を增加するやうになり、茲に檢査の必要を感じて明治二十三年にツイ鹿兒島縣製絲合同檢査所を設くるやうになつたのであります、組合員の生産品は一旦同業組合の方で檢査を受けて、更に此檢査所で品位の檢査を受けねばならぬから、自然遲い品を造らぬやうになり、其技術の進歩も著しく、明治四十一年に至つて始めてエキストラ額に入るやうな良い絲が出來、今日に至つては器械生絲にしてエキストラ額に入らざるものは五十除戸の製絲家中二三戸に過きないやうになりました……（未完）

---

精力主義の成功者

# 若尾逸平翁

重富夕星子

人が其生涯により多くの成功を期待して明日と活ふることは、時の古今を論せず、處と人種の何たるを問はず、曾て一樣であらうと思ふ、好し夫れが人生の理想は安逸なるにあり、安逸を求めよ、安逸にして食ふに羨ましなき時機來らば、やがて黃金時代なりと解く安逸主義の者に在りても、又人生は働らくべく自然に成されたり、暫くも靜止すべからず、努力せよ、向上せよ、向上して或者たれと、人生を戰場視する活動主義の者に在つても、或る時と場所とに於て其希望一樣であらうと思ふ、好し夫れが人生の理想は安逸なるにあり、安逸を求めよ、安逸にして食ふに羨ましなき時機來らば、やがて黃金時代なりと解く安逸主義の者に在りても、暫くも靜止すべからず、努力せよ、向上せよ、向上して或者たれと、人生を戰場視する活動主義の者に在つても、或る時と場所とに於て其希望一樣であらうと思ふ、好し夫れが人生の理想は安逸なるにあり、安逸を求めよ、安逸にして食ふに羨ましなき時機來らば、やがて黃金時代なりと解く安逸主義の者に在りても、暫くも靜止すべからず、努力せよ、向上せよ、向上して或者たれと、人生を戰場視する活動主義の者に在つても、或る時と場所とに於て其希望一樣であらうと思ふ、好し夫れが人生の理想は安逸なるにあり、安逸を求めよ、安逸にして食ふに羨ましなき時機來



を期待して奮勵努力する結果、社界の運命は日一日と急激になつて文明の美花を盛み滿開ならしむるのは衷心より快哉を叫ばざるを得ぬ。

但し今其反面には悲慘を畫くとしても、之等の敗者、之等の負傷せる戰友は成功を期待せねばならない、其進路に善美を盡さねばならない、其失敗の歷史を探れば不知の間に精力を消失せしめて氣が付かなかつたのである、例へば底なき桶に水を盡らんとするに異ならぬ、誠に氣の毒ではあるが致し方ない自ら之を防ぐに非ざらんよりは他に施すべき路なきを奈何せんやだ

## 天は自ら助くるものを助く

政界に名を爲せるもの、實業界に名を爲せるものは、日本廣からず之も其人に乏しくはない、乏しくはないが多くは否却て實を結ばざるを異とするのみ、凡庸の成べくして成らざるを異とせずや、養ふべき士なく據るべき基なく、貧賤より興起して連城と戰ひ、百難を排して成功せるもの、經歷程等に人は茲に主題として捉へ來れる者尾逸平翁が巨萬の富を一代にも贏ち得たるを深感するものに非ず、事業に非ず、能はざるものは其富に非ず、事業に非ず、其之を欲意し指自動自發、孜々勉勵勞孚として堅忍持久、其精力を注き、心血を注げる點に在るのである、其に其經歷は偏夫を以て立たしむる慨ありと云ふべしである、之を時代的の言葉で云ふならば、精力主義の標本である、嗚呼、我を救ふものは我にして何人も其美しき運命の寶庫を開拓すべき鍵は常に各自の左手に握りつゝあり……とは云へ徒らに百千の若尾を希ふ勿れ。

## 良い薬は苦いだらう

國滅れて忠臣顯はれ、家貧にして孝子出づが千古不磨の確言なりとすれば、家貧しからざれば孝子表はれず、國平和なれば忠良の臣もない樣に一寸考へられるが、人世の萬事は求數的には當て嵌められぬか、概括したら或は背紫の價なしとも言はれる、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、されど孝子たらんが爲に、貧困を、希ふものも非ざるべし、

くも今頃未だ吾が手助けを乞はみはせじと、愚痴を零したかどうかは知られぬが、朝に美酒の滴り高を見、夕べには駒嶽の朝霧に風を凌げる松ぶが枝の音を聞き入れ、富士川の流れに注ぐ釜無の清流に足を洗ふ中巨摩郡武市吉家邸に、水翁野夫と土を堀つた。

## 王侯宰相豈種あらんや

水は靜止して流れざれば腐敗する、海水の腐敗せざる豊鹽分のみならんや、今釜無の貧々として誰きぬ流れの源泉を尋ねれば、滴る水の無れるのみ、富貴の大は一塊土に過ぎぬ、王侯宰相も亦種あらんや、身を武に起して脚を延ばして若かずと、青年血氣の優閣を畫いて、鄙間を出て、本所清水に英仁侍、来公を尋し、関ヶ原がな御面御小手と馬ふみし、萬事に事缺ける殿君は、柔成らずんば死てまるを得ざらしむる至つた。

蓋し此の當時に於る翁は孤憤自ら未來の武夫を任じたりしと雖も、未だ此の時代に於る翁は一片青年、名流の血氣のみ、情に絆されて動く尋常人のみ、然れども馬に秣飼ひ田に草耘除ることは如何にして鳥が好かなかつた、父の情に涙かされの小も爲ふ田園生活を續くることと四年なりしと雖も、家粒少き農業には絶たらぬ、幸に土打ち行を利用せばヨリ多くを扇ち得べしと考へて、父に同じて其志望を遂べた、義に武夫を扇りて農夫たらしめし殿君も、此の志望は捨き得ぬ、潔よく桃李に金二兩を添へて其道路の費とした、翁は知られぬが、朝に美酒の滴り高を見、夕べには駒嶽の朝霧に風を凌げる松ぶが枝の音を聞き入れ、富士川の流れに注ぐ釜無の清流に足を洗ふ中巨摩郡武市吉家邸に、水翁野夫と土を堀つた。

## 悲火心曲を焼く……噫又噫

人間萬事苦事多しでイッモ、トン〳〵拍子にウマク行くものではない、常に何等かの障碍が何等かの誘惑が眼れては其前途を遮り、折角身りかけた成功の段階から其者を引き墜さうとして居る、物に動あれば反動がある、反動を起し得ぬ程の勇氣と抵抗力とがない者は多くは茲で滅入て終せふが、反動し得る忍耐と持久力とがあるならば、何とか形作るが例で ある而して其誘惑が女性に關するものの程、酸鼻の滅入り方もするが又刺目する程の反動も起するものである、見よクレオパトラの一笑を買はんが爲には、シイザーも骨抜となり、常盤の一頭一笑を購はんが爲には子孫を滅ぼすをも清盛は厭はなかつたではないか。

翁も如何なる魔鬼を背むるも無はざる翁と雖も、血あり情あり何ぞ有利の環にのみ應み得んや、時に挫折と轉倒とに逢ふは





必然の結果である、左れど吾れに不撓不屈の武器あり、失敗は經驗の母と思ふて、御坂、小佛は愚かなこと、如何なる天險も吾が七生の敵あらんと、闖入州を跨ぎ、行くに綿を付け、賣り布を賣り、東、草を賣り、柿を賣り、鋸を賣り、等、西、走傳さに辛酸を嘗めること四年、辛ふして百五十兩を贏ち得て、自費的商法に立脚することを得た、現は百五十兩は勝れも大なる百五十兩は勝てない、時に於て百五十兩を引出して小資家と云へば、其家が小糠時は既に家道傾き、時は既に家道傾き、身上潰れて、雲散の契を結び、底に入つて、音も恐らぬ樣に、小人口とは思つたが、事實は、僅か一年半にして、百五十兩を持つて、田園に歸り、田は云はずもがな、家屋迄、悉く元の樣になつて居たつた、土藏を釜に、後、繊れば、そを來たのだと、だしい、エヘヘヘヨ、上げた自我の獨商法を、朝に行を、御坂を、越へ、力とし、過去に鍛へ、雪の中を、越へ、み、夕には八ヶ岳の月を友、雨に嘶り風に、前後を忘れて、前へ、後へ、七年、家政改革すべく心を勞し、其効、田畑、家屋、迄悉く我物となる樣に、利益、幾分の資金、獲し得る程になつた、ヤレ嬉しや、ヤレ嬉しや、ヤレ嬉しや、ヤレ嬉しや、骨休みと、翁、家へ、大活動を夢み、休養すべく、湯治して、七月三十日に歸り見れば何ぞ計らん、吾が妻のそは〳〵しさ、（未完）

---

# 蠶種直輸販賣者之魚雁故川村永之助翁

（承前）

西八代郡立農學校教諭　田村兼藏

## 伊國ゼノヲ殿下より謝狀を受く

翁の爽眼なる風に時勢の止むべからざるを看破して留學生を伊國に送り、時々其の報に接して翁々歩、裏改良の生を進めん、其の歸朝するを待ちて一呼己れが金つるとゝろに合せしめんと扇動朝するを折柄もよし、明治拾貳年、伊太利國皇族「ゼノヲ」殿下の來朝せらるゝあり、此乃ち好機逸すべからずとなし、川尻組頭取の資格を以て同組合製造の蠶種拾貳枚を、殿下の台覽に供へ、之れと同時に際情書を上て伊太利政府に於て蠶種販賣上、格外の保護を與へられんことを乞へり。

殿下翁が赤誠のあるところを察せられ拝呈の蠶種は御嘉納あらせられ、加ふるに左の賞狀を賜へり。

賞狀

一、蠶種拾貳枚

上、

候、隙者今般川尻組頭取の名を以て貴下より我邦族「ヂュクトゼノヲ」殿下へ秋田郡尻田組製造の蠶種拾貳枚入壹個御進呈相成殿下には欣然受領被致候、精良の名譽御信用を得られたる品は遠く本國養蠶家へ送附可致依て右厚謝可相述樣殿下より敬稱を以て稱贊可致爲の蠶種を我國に於て稱贊可致爲の蠶種を我國に於て稱贊可致爲の蠶種を我國に於

於遂 塞 館 千八百七十九年十二月六日

ゼノワ 廢 陸軍大佐 タルブ、エルノ 明治 藩 ゼノワ 藩 ゼノワ 藩 ゼノワ

を念とすること能ね此の如し、惟ふに翁にして始めてよく此の事を爲すべし、愛ぞよく他を之れに擬すべけんや。

## 著れたる翁が公歴

翁の生涯が公共の事業を以て滿されたる如く翁が履歴は則ち翁が公歴にして翁の公歴は直に以て翁の生涯の歴史たり、其の複雜にして多岐なる到底有限の外面に盡くすべからずと雖も聊ふことろは遂に公共事業の爲に活動したる遺跡のみ翁の公歴を安政五年亡父の跡を襲ぎ蚕業主業の役所に郡役人として出仕したるに始まり、明治六年一月蠶種大總代となり、十年全國蠶種製造組合議員、十五年組合議員、十八年秋同縣勧業諮問會員、二十二年川尻村長、廿四年米國コロンブス世界博覽會出品事務委員、全國蠶業大會秋田縣代表者、三十三年本會評議員等となり、遂に本年三月二十七日を以て逝場として歳へ、第の爲め哀情の堪へざるなり、生前其の善行、功績を賞せられしも知事及縣より各目録及銀盃一箇、秋田郡農會長より感謝狀、大日本農會より繭紙賞品等給ど下より有功章等あり、此の外其の出品に係る褒狀賞品等給ど躬秋に亞あらず、生前の業悲既に此の如しと雖も翁遺業に比すれば未だ以て目前の蕊火のみ、吾人筆硯を見めて翁が遺爛たる事業に憤惜して之れを宗しうせんことを恐る。（完）

# 實務 桑園年中行事

愛媛縣蚕事改良會 池田榮太郎
馬場由

陰鬱たる梅雨は已に去つて此月に土用の酷暑は來るのである、各官衙學校の暑中休暇は始め、續本鐵道は日光回遊列車を始め其他の遊暑地は一般に賑の時節である、併し飲食物等に特に注意すべきも亦此時である。

夏朝や故郷に偲む舟の中　格堂

さまかへて御庭に拜む蜩の聲　石堂

已に一度摘桑せられ又刈採られたる幾多の桑葉は漸く再發芽を催し、全國の緑日々に濃かとなるのである、此際桑園には何を行ふべきものであらう。

## 第二回除草

前月下旬より此月中旬初め迄の間に、第二回の除草を行ふのであるが、是等の作業を晴天の日中に行ひ草根を枯死せしめ又同時に株の根際に土を寄せ、畦の中間六七寸を回せ置かねばならぬ。

## 夏蠶用摘桑

此月から夏蠶の飼育を始むる處が多い、併し桑葉は何所より之れを謂めたものであらう、夏蠶用桑園を特別に持たなければ、從つて春蠶期に用ゐた再發芽を利用せねばならない、茲に注意すべきは摘桑の際決して抜き取り等の粗暴をなさず、必ず一葉づゝ、專用桑鋏の等で丁寧に切り摘むが宜い、然らざれば次年の伏芽を損じ、大に其翌年の收穫を減ずる者である、又一梢中より悉く葉を摘むなどゝいふことは謂なき桑棚に死刑を施すやうなものである、少くも枝條の全長三分の一（上部）を殘さなければならぬ。

## 園中即事

七月乞巧娘　杆軸報成章
村々蚕鎮香　天絲雲錦裳
瓜果庭前麗　兒女鏡拜忙
秋なくて誰も遇ひ見ぬをみなえし
契りやをきしほし合の空

# 絲況

## 横濱市場

六月中の横濱生絲市場本年の春蠶は良好又良好の蠶の下に目出度終りを告げやうとしたが、好事魔多しとやら六月中旬頃から引續いて梅雨に陰り、又は上旬蠶又は上旬蠶に陰多く、其牧繭額も實際に於て減少を免れざるの狀況、其の結果は相應に高かつた、這な高い原料を仕入れたる製絲家は又大失敗に陥し頭は如何ぬかとは局外漢の杞憂であるが、此時此際は横濱埠頭は如何なる光景を呈しつゝあるであらう、多少なりとも絲況を氣遣ひつゝある者は管絃の目鹿の目で日々の成行如何を觀測して居るのである、併し吾等は乍遺憾現在の狀況を遺憾に報導し得ず、イツも乍ら六高十前の際に陥ゐる誹りを免れないのであるけれど、性を知り來を知るのまた淘に必要なことであるから、例に依て客月に於ける市場の光景を述べてみやう。

先づ其上旬に於ては各館とも新規注文を控つた模樣であるけれど、何れも新絲待ちの姿であつて唯安直ならば買入れ

様といふ位であつた、處で資人の力でもコ、片樹商内として十分譲形を爲したので端境の割合には荷動きは多かつたが、段々市場は面白からぬ趨勢で、其中頃を割り遂に一萬梱臺を割り、一般相場は下落し、遂に一萬梱を割り待ちの新絲は漸く出鼻より手細に計りに過ぎないので抑々しき商談行はれず、絲價も右絲上一番八百六十圓より下落して四十五圓となり、歐米機業界の狀況も亦不良でないと絲入荷は逐日加し、歐米機業界の狀況も亦不良でないといふ見込もあり、一方繭の高騰なるに対し人氣何んとなく強硬の裡に下旬に至つたが、繰り物の入荷と共に商談益盛となり絲價は日々昇騰して遂に二十五日には上一番九百三十五圓といふ近来になき高値を示し、絲家も悲はず聞もなくチ了〜安の趨勢となり、月末には九百二十圓を報じ、本稿を草する當時には又元の入百圓臺に成下がつた。

**前年との對照**　容月中の市場の大勢は以上の如くであるが先づ其出散表を示せば次の如くである。

## 明治四十二年六月自一日至三十日生絲集散表

| | 持越 | 入荷 | 賣了 | 地方積置 | 繰越 |
|---|---|---|---|---|---|
| 器械 | 二二〇 | 二四四 | 一一一二五 | 一一〇一〇 | 二一七六 |
| 座繰 | 二〇九三 | 一一一二三 | 一一一〇六 | 七二六 | 四六一 |
| 中太 | 四五八 | 三六八 | 一一一 | 一六三 | 一九三 |
| 同 | 二二 | 一一一 | 一〇七 | 一一八 | 一一九 |
| 同 | 四八 | 一一六二二 | 一一一八九 | 一一八九 | 三五四九 |
| 同 | 一四七四三 | | | | 一〇九一七 |
| 折返し | | | | | |
| 雑絲 | | | | | |
| 合計 | | | | | |



## 明治四十二年六月自一日至三十日生絲集散日別表

器械太　座繰中　同同　同同　折返し　雑絲

○△□

| 月 | 日 | 曜 | 入荷 | 手合 | 賣了 | 引渡 | 輸出 | 地方積置 | 國名 | 社名 | 別種 | 最高 | 最低 | 直 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 一 | 新古 | 三七一 | | | | | 一五八 | 上野 | 下仁田社 | 歐 | 綿 | × | | 一〇 新規注文も乘らず且盛常出荷にて更に商談なかりし |
| 二 | 二 | 同 | 三三〇 | | 六四二 | | | 二一五 | 同 | 同 | 未 | 定 | 定 | | 補充すしかるに信州物更に上調安にて補充人氣に乗せり |
| 三 | 三 | 同 | 三三九 | | | | 六一四 | 二一八 | 同 | 同 | 未 | 定 | 定 | | 横いて不況十調安の人氣に乗せり |
| 四 | 四 | 同 | 二二八 | | 一八 | | 一三八 | 信濃新代共 | 同 | 倉 | 一〇 | | | | 歐洲の相場に多少補充調りしも盛常物浮く且つ相場も強気変嘱へなりし |
| 五 | 五 | 同 | 一四七 | | | | 三三八 | 四一八 | 同 | 金 | 定 | | | | 直の方に賣日々見るのみなりし |
| 六 | 六 | 日 | | | | | | | | | | | | | 日　曜　日 |
| 七 | 七 | 同 | 四七〇 | 五〇 | 七二一 | | 二六九 | 七二一 | 同 | 上野下仁田社 | 繭 | 手 | × | | 九一〇 安直見切物にて多少拾ひ買氣に見る動りも下落する一方八五〇〇 他産に刺激されて氣配全て不味なり |
| 八 | 八 | 日 | 一四四一 | 四一 | 四六七 | | 一一三 | 一一三 | 同 | 同 | 未 | 定 | 定 | | 繭糸同事 |
| 九 | 九 | 同 | 一一八 | 五六〇 | 一八 | | 一七三 | 一七三 | 未 | 定 | 未 | 定 | 定 | | 信州産品と云へ八百二十圓に下落し且一番商自からさる成行なりし |
| 十 | 十 | 日新 | 二三一 | 四七七 | | | 一七〇 | 一七〇 | 未 | 定 | 未 | 定 | 定 | | 一蠶餘安物補充口へ多少買氣あるも相場は増加の傾向にて氣配全て不味なり |
| 十一 | 十一 | 同 | 二七六 | 三八 | 三一七 | | 一〇七 | 一〇七 | 未 | 定 | 未 | 定 | 定 | | 一蠶餘安物補充口へ多少買氣あるも相場は増加の傾向にて氣配全て不味なり |
| 十二 | 十二 | 同 | 二五二 | | 三一七 | | 四七七 | 四六七 | 未 | 定 | 未 | 定 | 定 | | 弱く相談なる商りの出乗せし位にて他は挙げて不況なり |
| 十三 | 十三 | 同 | 一一八〇 | 四三 | 三三三 | | | 一一二 | 上野 | 交水社 | 繭 | × | | | 本月新絲の約一千五百三十梱方に比べ約一千五百梱方に比べ約三千梱方に比べ約一千五百梱方に比べ約三千梱方に比べ約一千五百梱方に比べ約三千

| | | |

## 霊病撲滅策

| 號 | | 再出穴日 | 再入穴日 | 發生日 | 霊見の強弱 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第壱號 | 同 | 七月二十日正午十二時出穴 | 七月二十一日正午十二時再入穴 | | |
| 第貳號 | 同 | | 二十二日正午十二時再入穴 | | |
| 第參號 | 同 | | 二十三日正午十二時再入穴 | | |
| 第四號 | 同 | | 二十四日正午十二時再入穴 | | |
| 第五號 | 同 | | 二十五日正午十二時再入穴 | | |
| 第六號 | 同 | | 二十六日正午十二時再入穴 | | |
| 第七號 | 同 | | 二十七日正午十二時再入穴 | | |
| 第八號 | 同 | | 二十八日正午十二時再入穴 | | |
| 第九號 | 同 | 七月二十九日正午十二時出穴 | 同 二十九日正午十二時再入穴 | | |
| 第壱號 | | 八月四日正午十二時出穴 | | 八月十三日 | 同 |
| 第貳號 | | 八月五日正午十二時出穴 | | 同 十四日 | 同 |
| 第參號 | | 八月六日正午十二時出穴 | | 同 十五日 | 同 |
| 第四號 | | 八月七日正午十二時出穴 | | 同 十六日 | 同 |
| 第五號 | | 八月八日正午十二時出穴 | | 同 十七日 | 同 |
| 第六號 | | 八月九日正午十二時出穴 | | 同 十八日 | 同 |
| 第七號 | | 八月十日正午十二時出穴 | | 同 十九日 | 同 |
| 第八號 | | 八月十一日正午十二時出穴 | | 同 二十日 | 同 |
| 第九號 | | 八月十二日正午十二時出穴 | | 同 二十一日 | 同 |

霊病撲滅策

通常官員　前川淺吉

霊病撲滅の強力なる武器は、病毒の撒布を防ぐ可ちゃ、故に全く底に霊病撲滅の仮令的霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以て信じ難き霊薬の如きものなりと雖も、以



霊病撲滅策

# 問答

## 蠶卵の耐寒力に就き質問

岩手縣 通常會員 岩崎 久左衛門

蠶兒の耐寒力に關する試驗成績はあるけれども蠶卵の耐寒力に付ては未だ一定の公表あるを聞かない。從來蛹經過の早晩に依ると雌氏の孵下十二度位迄は室内容液の凍結しないのを認めたことはない（死卵或は孵化迄は別として）元來生卵は細胞的に凍らぬ（原文ママ）ものと云はれたなら仮令一度凍るとせう、其限度を何れかに果して度結するものとすれば、其卵の生理故障がないものでせうか御教示下さい。

農學士 林 輝作

答 蠶卵と蛹との關係に就ては、昨年東京蠶業講習所に於て土屋技師が試驗せられた、之によると越年性の蠶卵を人工孵化試驗して、雌氏孵下十八度乃至二十度に八日間まで保たれると、其蠶卵は發生が二日間延長したのみで、發生にも異常にも異狀は認めなかつた、思ふに蠶卵の低溫に對する抵抗力は絹糸程大なものであらう。

## 乾繭兼用消毒器の件に就き質問

島根縣 通常會員 青山 鹿之助

大は或繭十石より小は一石系統病の養蠶家百戸共同して、乾繭兼用消毒器の設備を設付けやつと思弁が學理上經濟上實驗上當時何人の發明に係る何式の器械か一番能率で有利か教て下さい。

農學士 林 輝作

答 十石乃至一石取りの養蠶家百戸共同に繭の乾燥を行ふには可なり大規模の乾燥設備が要る、其石に付ては東京市芝區三田四國町林原次郎氏外百四五人位乾燥の器械は東京市本所區德右衛門町中屋民製作の二百入乾燥器など其好である、何れも乾燥の時期は十日ホニ三日間であるから、其間に乾燥し得る丈の規模に設備せればなるよい。

繭乾燥室を蠶病消毒に兼用せんと欲するものゝ如くなるも乾熱消毒は到底實際に行ひ難い、何となれば微絞子の如きは十分間五分間五度位の溫度と十分間五度接觸せなければ死滅せない、然れば蠶は焦現するを免れない、若し又フォルマリン消毒を行ふには硫黄の如き刺戟臭なきものを選ぶ事、殊に蠶卵は多少酸び易いから消毒劑若にて之れを行ふのが得策であろう。

## 野鼠の驅除豫防法に就き質問

新潟縣 通常會員 伊藤 駒治

近來私の地方では桑樹に蠶育及び蠶卵の被害が甚だしく困難つて居ります、撲滅方法等其行政上よりして、何とか豫防法の方法を教へて下さいまして、其詳細なる方法は如何なるものであるか、又は野鼠の被害多き地方の農家に協同して、野鼠驅除の試驗を依頼するも宜しからう。

農學士 堀 正太郎

土質に就き質問

愛媛縣 通常會員 梅村 柳司

一反歩位の畑が數個所茶園に有つたのを整合に依り一團地の桑畑の造成に使用し度用と、後に園内茶園にしたいと存じますが宜敷有り作物は桑樹に適入し居るから、人の說に依ると樂品多數發生入に使用し、其排物が過剰に達入し居るから、桑畑の作物が枯死する虞れがあるから、何れか有効な方法を教へて下さいまして

# 會務錄事

## 支會職員の囑託

本會所內各支會委員部長及び議員、三重、秋田、山口の三支會委員部長中無勤ありたるにつき、又千葉支會委員部長は後東長員の歳今周年の祭典に依り本會へ別紙より夫々左の通り囑託せられたり。

新潟支會西蒲原委員部長　小山　龜作
南蒲原　田宮　常雄　北鳥居　盛藤　鐵男　同常議員　林　俊太郎
三重支會三重委員部長　北野　孝一
秋田支會秋田委員部長　河野　榮性　南秋田　三輪　正鍵
鹿角　戸崎　順治　河邊　猶內　政之助
山口支會吉敷委員部長　塗師議員　原　要　二
千葉支會安房委員部長　太田　貞行　寒鳴　澤　寛藏
君津　岡　勝　長生　渡邊　勉　山武　行方　幹
千葉　神田　清治　市原　池內　才次郎　東葛飾　石井　慈夫
印旛　中山　鉄一郎　香取　大貫　雄次郎　海上　吉本　鍵吉
匝瑳　宮澤　芳　綱

## 地方委員部職員の囑託

本會及び本地方委員部地方委員副長以下委員及び地方委員地方委員長の推薦に依り前長員副長以下、委員より夫々左の通り囑託せられたり

鳥取地方委員副長　石津　和風
委員長部長　岩　美　水谷　豐一　入　頭　丹羽　且次
鳥取　高友　成　東伯內海　鈴　西伯　弁上　孝道
日野　弁上　厚治　鳥取　藤岡　直藏
地方委員　吉田　元吉郎　谷川　熊次郎　相原　保作
倉吉　竹治郎　宮本　文次郎　山內　虎藏　溝藤　礒治
宮盛　好藏　酒井　虎藏　坂口　平英雄　湯上輪　源太郎
川上　益藏　朽木　綱一　丹羽　竹造
宮脇　松太郎　江島　榮太郎　渡邊　彦治　高田　傳藏
溝田　志治　矢城　富造　田山　虎次郎　小倉　虎吉
奥谷　愛爲　奥村　弘道　大江　秀治　谷口　龍二
弁上　安太郎　四尾　晉一郎　石谷　傳藏　河崎　鎮太
淡雪　俱武藏　橋井　其三郎

## 通信範員の囑託

本會靜岡郵通信委員生方五郎氏辭任に付き、又青月鶴通信委員加左の通り夫々本會へ聞より囑託せられたり

靜岡　太田　英太郎　吉川　高橋　寛藏

## 特別會員の推擧

左の諸氏は本會へ發に貢獻せられたる勞功顯著なるにより本會功勞者及篤志者待遇內規により特別會員に推擧せられたり。

茨城　竹內　忠興　池田　序介
三重　茂呂　鐵一郎

## 蠶桑雜觀

### ▲韓后勅業模範場へ行啓

青葉馮れる夏の初、韓國皇后陛下には養蠶御視察として月の一日水原なる勅業模範場に行啓仰出され、授すに李前二代定宗皇帝以來歴朝の御親蠶并に勅業の奬勵あり し事蹟は夙に明なるが、茲に基盤堅固なる國力の增進偏へに切なるの時、親自率中上とは常に其の大計に絮念寄らせ給へる聖慮を傾はされ、即ちの呼は在山氏國の御國途視し、國場の農事を識はし給へ今



又皇后御親蠶の御事水にはりつるに重に又盡の行啓あり、之れ恰も我が維新の大業成るや、今上陛下勅業の途を講じ百官官有の為に努めし時に於て蠶業の奬勵に、又皇后陛下に於も、東京府側に幸し親く蠶絲事を御巡覽かられたれる、又皇后陛下の遠く祖母后の跡を辿り給ひ年蠶繭を御覽かられたれる、又たる御事と彷彿たらずや、豈に韓國の為め賀すべしと雖て韓國民の克くその聖旨を奉戴し之れが效賞に奬勵に各奮勵を徹ふるところなしと可からんや。

御召列車は前十一時三十七分水原驛御着、直に御馬車を召させ玉ひ御巡定の廟堂いと驚かに頭々として進ませる、此の日天清く氣朗かにして暑熱頓に高かりしかは、盛萬の事迎者に何れも陛下の御身を心配し

## 蠶業雜報

本日卒業したる七十八名の卒業生等に絵巻物を授けまして各々之を以て斯業に従事せしめるものであります

別下諸業の盛なる諸国に於ては卒業する者に於ては自本国に帰郷するとは雖も亦以て桑貢試験の御授助に依るものと信じ深く感謝致し共に御興隆光分の御援助あらんことを希望致します

次に卒業生諸氏に一言するとは貴子は本所に入りて規定の学理及技術を鑽研し蚕業の盛衰に関係して深く研究し本日迄に伝見貴所下賜端の学理及技術を基礎として卒業証書を受けたるも諸子は勿論諸子の父兄方教育に於ては今日の如き時代に於ては諸子の父兄方に於ては今日の如き時代に於ては諸子の父兄方に於ては今日の如き時代に於ては諸子の父兄方

岐阜縣　成瀬てつ　佐賀縣　宮副　マサヂ
石川縣　竹橋ことぶ　福岡縣　竹内ヨシヲ　岐阜縣　戸谷ちい
福岡縣　加峰キク　福岡縣　松浦キク　岐阜縣　野口ヨシ
島根縣　賀茂マツノ　福岡縣　田尻ツネ　東京府　馬場ムメノ
福岡縣　賀元マツノ　福岡縣　田尻ツネ　東京府　馬場ムメノ
島根縣　田尻ツネ　山形縣　鈴木ヨシ　福岡縣　田尻ツネ
島根縣　三浦ヨシノ　福岡縣　岡崎ヨシノ　福岡縣　田尻ツネ
滋賀縣　松下長惠　福岡縣　吉澤ヨシノ　福岡縣　田尻ツネ
山口縣　志賀ヨキノ　滋賀縣　南森むめ　滋賀縣　南森むめ
山口縣　志賀ヨシノ　滋賀縣　南森むめ　滋賀縣　南森むめ
愛知縣　青柳ヨシ　福島縣　田村イヘ　福島縣　田村イヘ
柳木縣　川邊フク　茨城縣　鹿嶋キヨ　茨城縣　鹿嶋キヨ
徳島縣　東アヤノ　岩手縣　佐藤キヨ　岩手縣　佐藤キヨ
岩手縣　福田ユマノ　青森縣　佐藤キヨ　青森縣　佐藤キヨ
岐阜縣　植村コムラ　山梨縣　清水やすみ　山梨縣　清水やすみ

蠶業試驗場なるものを設置致しました蠶業に現時の蠶業講習所なるものし創先であります。

蠶業試驗場は官設蠶業試驗所の前身であり、蠶業界に其勢害を及ぼせる微粒子病が本邦養蠶の致命的病毒なることを認めたるに由りて、此病毒の研究と共に蠶業の改良に大なる効果を及ぼすべきことを期し、明治十九年より蠶業試驗場を設置致しました

一、又當部の設置の認定に欲きましては大山知事閣下並に柳田內務局長閣下並に前原內務局長閣下並に高橋內務局長閣下並に水上殖産局長閣下並に鈴木殖産局長閣下並に平田

き地方に於ては既に五月中に於て新穀に米湯粥に現はるべく麦稈三ヶ月に五〇見當にて約定所の地方より

「ロンバルザー」至第九月三十一日、天候引續順良蠶兒の發育順良にて第一回の蠶兒の第五月三十一日蠶兒の發育成熟收繭所の雛形美麗五月三十一日蠶兒の發育順當次前分は四眠なる結構の雛形

同　六月一日、不相變蠶兒の發育良好概して四眠前後に在り平原地方に在りては四眠なる為へ第四期の繭を見るべし

「ピエモンテ」「ヴェニス」至第四期五月二十八日、一昨日の殺蚕にて繭等の一部分を回收引故に最終の結果は思ひと程悲しかるべし目下の天候は飼育に適す

「チャンピ」五月三十日、前報以来取立蠶兒の發育順當次前分は四眠なる為へたり蚕後繭等の案を案ずりしか故に總て順當に進行せり蠶兒は目下三眠中

洪牙利、洪牙利、五月二十八日、總て順調なり繭等の

洪牙利、五月二十八日、總て順調なり繭等の

「ヒエモンテ」「ヴェニス」至第四期五月二十八日、一昨日の殺蚕にて繭等の一部分を回收引故に最終の結果は思ひと程悲しかるべし目下の天候は飼育に適す

「チャンピ」五月三十日、前報以来取立蠶兒の發育順當次前分は四眠なる為へたり蚕後繭等の案を案ずりしか故に總て順當に進行せり蠶兒は目下三眠中

# 蠶海涓滴

△曾根統監　新任の摂政日露協約を締結し先づ其の人を新にして經營の課程に上る、此の締約曾頭氏の旅には發議の政論伊藤公の旅には好個の泥土産。

△本邦新發　明治曾無新案悉外品概造學者も夢寐創なく講釋は曾取次也。目を子嚙る暇の無き國民特案の國恩思ひ造られて盛夏仰聖なる生ず。

△富士瓦斯　紡績會社去十五日當部甲崎町同社商張所に定時總會を開き一割四分の配當を可決し更に臨時總會を開て八百萬圓の增資案を可決す盛なる幾。

△東京蠶業　講習所表十二日卒業式を擧行し本會總裁代見宮殿下台臨あらせられ盛況なる全容を聞ふ是國同所卒業生の名譽なるのみならず我蠶界の名聖。

△ハリスト　正教會信徒大會を騰同都なる復活聖堂に開催中大教ニコライ杉山某とを後論すと稱神の子と稱する一人の各物品種の見聞ふ示會經。

△小笠原島　に野蚕多きと甘日鼠蟻島やもり等の有害動物多くして養蚕の見込なしとは物か蚕也何とか除害の方法を講じて野蚕利用の道を立てたい。

△親分銀次　逮捕せられて乾兒の拘引の檢擧に魯興鑑有て只來の大奏斷。

△本會副會　頭石勾農學博士日糖事件の全貌を一身に負ひ來十一日總評死を決して自殺す何と夫れ壯烈思想なる者人は以て現代武士道の典型となさん。

△一度博士　の農藥文書に公になられて新天下の同情問ぜずして集る疑惑新月部大町等の鼠蟲論を嗚へて死屍に鞭打たんとす冷血動物もあるものかな。

△實業界の　尊卑人情の典型として尊敬の念を拂ひたる遠部男爵が博士の處決に對する悲度人情以外に出づ男爵今日迄の行動全く慈老狸の仕業たりしか。

△高崎種市　場の實況を調査し其悲惨なる光景に一驚したる信州東筑摩郡諏訪蚕組合副組長鳥羽氏蠶種製造は之恐ろしき商賣なしと歎聲を漏らす切。

△信州諏訪　の大製絲業株式會社の失敗に所立の他はず其工場全部を閉ぢて小野先家氏に渡せりと之れ氏の不幸のみに止らずして蠶業界の不幸歎久嘆。


## 大日本蠶絲會報廣告料

| 特等 | | 並等 | |
|---|---|---|---|
| 回數 | 一頁 | 半頁 | 四分ノ一頁 |
| 一回乃至六回（一回ニ付） | 貳拾圓 | 拾貳圓 | 七圓 |
| 七回以上（一回ニ付） | 拾七圓 | 拾圓 | 六圓 |
| | 拾圓 | 拾五圓 | 拾貳圓 |
| | 拾圓 | 八圓 | 七圓 |
| | 拾圓 | 五圓 | 四圓 |

●會員は右料金の二割引とす●四分の一頁未滿は謝絶す●前金にあらされは掲載せす●一頁は一行二十七字詰七十二行とす



●本報定價　一冊金拾五錢　一ケ年分前金壹圓七拾錢

明治四十二年七月二十日印刷發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京市神田區錦町三丁目十八番地　小池松市

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　鳥太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）




## TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(June 1908.)

| | Brought over. | Arrivé. | Arrivé. | Vendu. | Sold. | Exporté. | Export. | Restreint. | Sent back. | Emporté. | Brought forward. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Filature. | Filature. | 7,242 | Picul. | 6,958 | Picul. | 6,193 | Picul. | — | Picul. | 1,562 | Picul. | 8,745 | Pi-ul. |
| Zogari. | Eeeed. | 1,140 | | 207 | | 408 | | — | | 259 | | 700 | |
| Kakeda. | Ordinyoshi. | 262 | | 12 | | 99 | | — | | 109 | | 73 | |
| Ambrea. | Other. | 11 | | 60 | | — | | — | | 67 | | 3 | |
| Total. | | 8,675 | | 6,557 | | 6,681 | | — | | 1,997 | | 6,521 | |
| 1908. | | 12,400 | | 9,385 | | 7,461 | | 7,414 | | 675 | | 9,649 | |

## TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(June 1908.)

# MARCHÉ DES SOIES.

## MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de Juin.

Pendant les dix premiers jours, toutes les maisons ayant reçu des demandes nouvelles et les vendeurs ayant fait de grande concession, beaucoup de transactions ont été enregistrées. Mais les articles convenables ayant fait défaut peu à peu, la situation de notre marché pendant la dizaine suivante a été très défavorable, l'accalmie a régné partout sur la place. Toutefois, entrant dans la dernière dizaine, l'augmentation de l'arrivage des soies nouvelles a activé les affaires, on a enregistré nombr. d. transactions. Extra No. 1, qui accusait les prix de yen 8.40 a sauté à yen 9.20, de sorte que les marchands ont franchi joyeusement le mois.

# RAWSILK MARKET

## THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The general condition of the Yokohama market during the month of June is summarised as follows:—

During the first ten days, the firms were, one and all, favoured with new orders, and the sellers assumed a conciliatory attitude, so that there was a considerable movement of the commodities. But this favourable state of things gradually underwent a change, owing to the lack of good articles as well as to the dullness of the market in the middle of the month. Coming to the latter part of the month, however, there was an increase of the article put on the market and a revival of the briskness of business. So that the transactions were actively conducted: Extra No. 1, which had till then been quoted at 840 yen or thereabouts, made an upward leap to 920. yen. This served indeed to dispel somewhat the inactivity of the business.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

The following tables show the movements of the silks during the relative period:—



## TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

## DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

| Jours. Days. | Soie. Silk. Arrivée. Arrived. | Vendue. Sold. | Renvoyée Sent back. | Exportée. Exported. | Maximum du prix. Highest prices. Noms des filateurs. Names of filaturs. | Prix. Prices. |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | *Piculs.* | *Piculs.* | *Piculs.* | *Piculs.* | | *Yen* |
| 1 | 8/209 | 361 | 89 | — | Shimonitasha. | 910 |
| 2 | 6/135 | 196 | 121 | — | —— | — |
| 3 | 3/197 | 163 | 106 | 345 | —— | — |
| 4 | 15/152 | 411 | 78 | — | Iida-katakura. | 850 |
| 5 | 7/88 | 201 | 88 | 235 | —— | — |
| 6 | — | — | — | — | —— | — |
| 7 | 30/234 | 151 | 94 | 394 | Kannasha. | 910 |
| 8 | 17/81 | 263 | 64 | — | —— | — |
| 9 | 72/32 | 315 | 97 | — | —— | — |
| 10 | 21/68 | 268 | 96 | — | —— | — |
| 11 | 42/142 | 184 | 60 | — | —— | — |
| 12 | 73/192 | 187 | 68 | 263 | Kōsnisha. | 840 |
| 13 | — | — | — | — | —— | — |
| 14 | 111/14 | 124 | 194 | — | —— | — |
| 15 | 24/88 | 270 | 105 | 457 | Kokuhōsha. | 960 |
| 16 | 32/20 | 216 | 62 | — | Kanrasha. | 850 |
| 17 | 84/52 | 185 | 66 | — | Meijisha. | 965 |
| 18 | 132/45 | 273 | 62 | — | Sōeisha. | 970 |
| 19 | 132/24 | 190 | 81 | 123 | —— | — |
| 20 | — | — | — | — | —— | — |
| 21 | 257/59 | 287 | 84 | — | Hōsansha. | 940 |
| 22 | 256/34 | 441 | 118 | 284 | Kōnansha. | 1.005 |
| 23 | 284/31 | 290 | 57 | — | Nihonsha. | 925 |
| 24 | 320/18 | 358 | 28 | 185 | Kokuhosha. | 1.015 |
| 25 | 399/33 | 244 | 21 | — | Sudōseishi. | 1.010 |
| 26 | 296/6 | 319 | 26 | 264 | Kōnansha. | 1.020 |
| 27 | — | — | — | 275 | —— | — |
| 28 | 688/82 | 234 | 32 | — | Jyotosha. | 1.000 |
| 29 | 322/8 | 351 | 30 | — | Jyonansha | 1.000 |
| 30 | 498/— | 205 | 39 | — | Manzawaseisi. | 1.020 |
| 31 | — | — | — | — | —— | — |
| Total | 6.537 | 6.687 | 1.996 | 2.825 | —— | — |

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

# De l'enseignement de l'élevage des vers-à-soie pour des femmes à la Station séricicole impériale de Kyoto.

S. Ishiwata

Depuis l'année dernière, la Station a commencé l'enseignement de l'élevage des vers-à-soie pour des femmes. En voici les raisons :

L'élevage des vers-à-soie serait plus profitable s'il était fait par des femmes, parceque des ouvrages légers comme l'élevage des vers leur conviennent bien et que les femmes donnent beaucoup d'importance aux détails et que enfin l'élevage est fait ordinairement par des femmes dans la pratique. Cependant jusqu'à l'année dernière, il n'y avait point d'école de l'enseignement de l'élevage des vers pour des dames.

Des écoles normales, des écoles supérieures et des écoles professionnelles pour des femmes existent déjà en grand nombre, mais il n'y a aucune école agricole ou séricicole pour former de bonnes maitresses.

Le travail d'examen de la graine du ver-à-soie et l'élevage en commun des petits vers sont à transporter à la main des femmes. (Tous ces travaux sont exécutés maintenant par des hommes).

Aussi comme maitresses fileuses, comme manipulatenses de déchets et comme sériciculteuses aux écoles des femmes, les graduées des Stations seront spécialement très utiles.

Les cours durent deux années et le nombre des élèves admises monte à 60. L'enseignement des cours est principalement l'élevage des vers-à-soie, l'examen des graines, la filature, le tirage des déchets ainsi que l'éducation normale et ménagère.

Il y a quatre pratiques d'élevage pendant les deux années : la première année au printemps et à l'automne et la deuxième année au printemps et en été.

Les dimensions des bâtiments de la division des élèves-femmes sont les suivantes :

Bureau : 25 mètres 5 de longueur sur 5 mètres 5 de largeur.

Classe : 2I mètres 8 de longueur sur 7 mètres 3 de largeur.

Magnanerie : 36 mètres 4 de longueur sur 9 mètres 1 de largeur.

Filature : 32 mètres 1 de longueur sur 9 mètres 1 de largeur.

Pension : 45 mètres 5 de longueur sur 7 mètres 3 de largeur.

Au cours de cette année, la classe, la magnanerie et la pension seront baties dans les mêmes dimensions, parceque l'établissement actuel n'est préparé que pour une seule classe.